岷江入楚

若紫

5

若紫

十七歳　十月叙三兼中将

源氏君瘧病事

三月廿日為加持向北山聖坊事

赴山之次源氏見其僧都之姉尼等隠居之事

御供人々物語国名所之次申出明石入道女有様事

小柴垣間見之次見十歳許女子御事　紫上是也尼公ハ其紫上し祖母

僧都来告源氏君渡事就姉尼公事

僧都奉請源氏於坊事

僧都語尼公并姫君有様事

同時源氏対面尼公之次乞姫君事

明日北山聖奉加持奉贈物等事

庄人奉独鈷僧都奉贈物等事

源氏遣消息於尼公辞事

以中将左中弁以下参御迎事

僧都琴持参源氏弾給事

源氏君帰京向葵上宿所事
又之日書を小山尼上件事
二三日後又書を惟光於小山相尋少納言乳母事
藤壺宮煩病退出行す
源氏媾遇命婦密通す　　藤壺之御懐妊事
あつきなといひしおきてあらう給ひし三月つきにかくれハ
と云り見ハ六月のきし給ハ九懐妊ハ四月よりの事なるへし
源氏見夢を人ニ尋ぬ　有合点了し
秋七月藤壺参内之事
九月比源氏至六条京極之次尋按察大納言旧宅之事
　紫姫君外祖母之里し
十月朱雀院行幸舞人以下沙汰事
小山尼上卒去事　是九月廿日ト云
源氏宿紫上京邸遣少納言乳母行す
黒胡於帰而後使為頻妹し門事　此女不知誰人し
又惟光於京極家問姫君行す

源氏前撰和琴欲常陸宮事
源氏自出迎取紫姫君於二条院す
少納言乳母同乗西対ニ中将車す
姫君手習之次書源氏一首了事

瘧痼（ギヤク キャク）一イ
は寒 頭ノ刻
まつハ風にしたかひらんれて
痁（ワラハヤミ）俗言　發心（シンリ コヽロヽ）　瘧疾　二日ニ一度発ス
瘴（シャウ）瘧（キャク）之宅を鉄するの毒ある風しを八日たゝりを云月まちを瘧月瘧（キャクゲツギャン）と云
箋云 痁ハ古暴切 通作店 瘧疾一云小児口生瘡 通作痁
箋 夕白巻に 瘧（同）鬼にそ 霊氣あり あひうひし 気なり
よろ川小雨しなおひうつなと をまうるひまて厭術之ヶ白
く乱事志て杜子美ヶ時れ手提髑髏血と云句を誦してそ瘧ハ落る
とぞ 此かねハ真言宗の陀羅尼のちうりなり
秋
花鳥 杜子美時の詩髑髏血と云句を誦しても瘧ハ落るといふこと
これハ此ある句小野ふう えハ杜子美ヶ花卿奇云子璋髑髏血
横糊手提擲還崔大夫と云句也
雨しなひハ厭術して人とまうるひまつりひて 此割ハさわまてヽハ
俗語ならしこゝものときあしはうとまうもうと云て少しも雨ふる
てありし也 絶ハまうもうひと云ハうろうりひと云ハ重き急
此同し詞と目ゆるへるハ此ありられるもひしかれたるふあまくきや
箋
杜子美卿欽云子璋髑髏血模糊手提擲還崔大夫 棒列副使殿

子瑋反以兵攻東川節度李奐敗北於是叙南節度崔光遠
率其州将而致定討之子瑋既誅致定特功大掠肅宗聞之怒
由是不見推用公作花卿歌蓋痛之也
詩の心ハ首を斬て
とりあつかひしとかくれてしくと云し
手提擲還崔大夫　心花卿ハ崔光遠ニ背キ此句諱不合也此句古今痛の落ると云
又師説云ある人此句をことに痛とさしうるあらん杜子美夢よ
名云花卿か歌ハ還句也痛と詠し給ふ人ハ痛ハ贅也句ミ
こと句をはくをよ給ふしもうも句と夜深銭塲色月照白骨
此句まて削なかるへし
きこしよそたりし寺
箋北山
旧 向南山 方 箋曰
旧 此寺號ハ宗旨四十九院まて伝法蔵也
箋 河原院とかいし此院と云同称し　六波羅寺ニさつ波や赤塚の
山路のつらねりくん入てつれやもかれんけなまつらまて
つらねりハ赤塚をしと云説を解せし號るのつらなりは
清少納言枕草子に見えしめり　號る寺事　旧記ニ法勲
大補故原伊勢人槙武天皇御宇造東寺行事間所騎用馬於

鴨河原放失尋跡行登北山奉拝毘沙門天始建立此寺云々
箋 水鏡云延暦十六年故原伊勢人と云人貴船明神の法教まて
御ちなりし　　寿秋二くる陽とこめこし
しこ花をこそすひ人　　旧 糸召の人とし
まその度も世なり　　如 世なりに流布セしし箋
人てましすひ　　抄云 此歌の秀類居好く見えさると云
箋 上ノ詞ニ萬ハせしものと云ハ厭術の歌し此次ノ詞ハ世なりの生
孫のこくとも人よりつ風の歌し於いまし去ひの詞ハ情なき人
よりひの詞まで　宿木きんちえへし　秋前ニ項まて
御そてとうしたくひ　山なおさかにおかれして多く痛と落さらし
まそうちかりし涼み　如 あさひきし痛まそもらそハ落ある
旧 内存世伝しまつて　元しうすしとり　のやうハんし
とうきそつ涼く　小山の痛の伝ふもとらつ涼くられなとも風
も御うて　旧 老店 如萬日　箋 花香融院性店疾給之
時居天台座主慈惠僧正奏光痛無術之由奉慕三之後極召
参入奉加持即御平愈云々　花香融院痛痛といふつにせ所附

天台座主良源僧正とあるも事ハ天元四年の秋のよし
小野宮右府記にしるし侍る人ハ良源僧正楼立記作穂草
車手執杖阿闍梨二人左右扶之依大僧正云々
むかれそし　　家のさし
庭のぬかりいれ　　如 無漏之筆とし 箕
三月の花てとり　　毛より新葉人の名れさ白し
山ふかくさくらいまた咲りけて　　同 仕二首同、我もるから花し
同 里ハえみちりそてゆくしと見ぬ山のさくらハまと咲りぬ　定家卿記
日本紀にも あさかの花さちりつてとうし野さ山のさくらハまと咲りぬ 本柏
桜 かすみと花及川むけしもさぬ見し去りして将秋筆ほ、過事と武士
毛 今の世さくら所の花ハ散れむちりそて抜さうるると云つ
いさもくおもかる
不をれ隣り牙ゆく　　如 京気ありかなし
う言文の人をそも見うろうたゆあよつて世かせる人の筆き
寺のさ白も　　如 鶴る寺前ハ四半丸現の更紅清盛成隆し
あ以こ以中まで　　同 仏弟子須善提傾西天石窟箕

江古 いろうりん以ちわれ中にもう白ちは世のむかしのやかし　二行りん
呉苑云陳思王遊漁山忽聞岩裏有誦経声清遠寒亮使解音
者写之為神仙之色道士効之作受唄云
宋山詩云余家有一屋々中無一物とそ
あかりにや　　如 かしつるの弱しつうしけるゑし
ろうひめし仲しもしかる　　仲とかしつるのえしつかて二一
日 石つかに菊つきりし　すと中むし
きんとのおこるすひも　　同 絵方し山伏ハ修検者と云
毛修検也　　　　箕 様なのを云るハ志玄のむ云りてハたれし
如 年先てハ花世の利務なとハ知るも去成佐世でつてあうれなとハ去人あれ
　私云此筆めす但世のすをみすへ行いと云まあされう
太ところするもくのり　　　太田し
同 ささ人さうりの
箕 筆てし同、花つうりてとて
如 筆なしそのも世ハのすれる世係、欲入うるまれ人るとなき
筆かとそるるてし伝内かこハきう人きらんとなつ　寿円

身ハ葉ニ
枝の如し

内心の不調なる故に愁ハおこりて仏力にすがりて内心ハ損ずべし
如 食をも吸をも害の業となりてかくをそれあるべし
すゞせ
かゞやきまさる 箋曰
箋 佛日敎授衆生之心水謂加衆生之心水持佛日謂持
私或人云衆生乃水清浄なる時仏日の光自然にうつるべし
僧房（ソウボウ）とも
僧房のことは 如 箋に此詞によつて寺院をさしていふハ僧坊なり
河ハ清少納言枕草子などをさしてのたまふのつらなりとぞ
臧陵 九折 盤折 通嶽山顛 白氏文集 遊悟真寺 已上河箋載之
おなしく未来なれと 弄 業の尽るまで寺にすみて居させしくべし
如 僧都の房のさうしひ給ふべきなるべし
きよげなるやうなるなるべし 河 屋廊
なにかしの僧坊 箋 僧上の母の敬文尼公と見ゆべし
河 業死有化に見え宗僧都のかしの僧都と見ゆる此箋を挂せと 釈箋曰
こゝの二とせ 如 箋にこゝに楚若之のよし来る見ゆ

ねよりくらきん 河の詞し僧都とさして のまかし
何まうやゆけしけれ尼のまことなれ 如 箋に河の尼ひて展
つとめてうへ禅ま御念なるかき事と僧都の事のことを尼仏と佛の詞し
箋云ここき而まそておしてふるまひてゝもまへまといゝかゝるや
まよけなるまうハ 如 箋に尼君の尼の女かハなかるべし
弄 僧都の事なりなしと又尼公の事の女まうハまあかや
何ゆゑてまうる 閼伽 今云ハ梵語也仏前をはうのし 宣の時よ
必ちを汲ゆゑ此時ふよそに湯気の生ゆるし 瑠書云井花水を云
花くてり 箋 閼花とて時を花を汲よろるべし
うし二の女まして
家のまうつ尼二の女まうつのと申えつう 箋 河の供養の人て立ちて見まて
おもそれありくも 老も御供の人なるまし 梅女子 もしわつれん
かうしまへてくさしく見てていふなり
むかしこなたの 河し 念誦なるのさ事し
同身く河よらに 如 虎ハ月下旬なるより月の出はおくる故まで
ちう人の山まあらか うし後の山なり

河 門前秋水浅山絶日蕭条暁夢闌 出居雄卿
秘 源氏立出給ひておくりを見まはし給ふ所の山ともなとめくりて
かゝる所にすむ人　秘 源の詞し
これはいとあさく　秘 さふらふ人の詞し 良清か詞とも
私云 名もしるされぬ人なれは
人の国　箋 他国し　河 惟光也 是非のことはなにかきこえあり
伊勢あたり人の国まても物にて思ひやりなとふかくあらんと申す
ふしの山　秘 箋 源氏へまて絵をまいらせはいかに御絵の心まさり給はんと
なにかしのたけ
おもしろきうら　を なにかしの嶽は也ときこえと宮まても人々さし
西国の浦々ハ須磨明石のことを申やう賞翫して心ゆかし
近き所に　箋 播磨は西海にて大宰府へ近き　秘 弄 子孫の筆のすゝき
よろしけれはまいらせ給ふ　秘 或説 来皆良清か物語也 箋 同し
箋 良清か文をそ前播磨守しの奉の筆 葉門なし
私云 入道の娘をもとより良清か物語して思ひ人まうれ
ちかう所にハ心をかけしと　ふるよりは此人の心をかけたりし物語し
又良清ハ播磨守の子なりしてその名を残しけり　私云 物語の詞も
箋 源氏ありしの事をふくみたる詞の序し
いつかたよりも心の　河 阿かに曲 隈
ゆかしけれ　弄 おもしろきさまし ひく字一様ハ間てあそひ給ふまてし
我らは所をもとめて思ひし事を侍は心のあそひのすさひとも宮はかゝる
所を申さしたまふうたれ心をかけたるさまのそれとはうけられし
かの国のさきのかみ　箋 秘ニ播磨前司し明石入道のこと
新発意　河 新発心しゆへて秘門に入人の名し たれかも入道の発心
俗は新発意菩薩と云ゝてし
法華経の開白の時の発心者の事にて八入道なとをさしていふ人を入道
としてもかく新たなるを入道とは入道の新発意といふまて也 行
已上箋秘抄ゝ来也とよし
家いといたし　箋 河ニ さまし心のいたしくと云なり
秘 大臣のちにて　叶 弄箋同し
大臣の後まて　箋 秘ニ 源氏の後風まて四条の県令まて理運の人として
明石入道の事なり

いくへかり　(細)身のおもきをもて出仕をとゝめられけるにし
世のひとりのみかく　ひとくるしかなしひのみやこのみにし
をしかるをもて　(如)ゆかぬかしこそ家中にけふれきりふれ
宦をも辞し私なりへきに左遷をもて遠守になされん本願
云念のすなるもしこれハ世の人をまたりひなかとひうあとしいつてう
(箋)をも思ひとさへとのへりかうすれなうれぬかあさましくしてあらいたしけり
忠参りきもしもいかうおもふ心を忘の中ぬを捨てもうひかるへし
箋云只遁職よりのかうくしや　私云遁職といふハ左遷を宜と
いふ心なれをさ々れ世の代変かしらふつてり
(細)近衛中将任陸奥之例　後京実方朝臣長徳元年正月十三日
辞左中将任陸奥守即可罷任　比外例可勘
(秘)山陰中納言辞中将任備前守下向之由見三代実録
箋云実方ハ配流の心し例ならへうも山陰中納言之例也已上箋注之
おく時のりなり山をもとも　可與 日本紀 文選 奥ノ字をあつる
とよれり　叢雲奥　これも山かくさんし
海つらなるくいかしのひとくしき　西月かれしてあ入るゝ

(細)おりくるのハ須磨山なしにられ籠居へきとも陪来のきりをもてひとつにかまへし
またりのそふれる　(秘)海つらなるいそのうくまきれもあらすし
私云是よりあつくまて家居しもなくてつうとらふ
如ん山里ハ　須磨山なとを妻子かしらう流るゝ者よけ源へ行かてて
見とをまうり　此その住家退かしいかくれありうて奥を宜と
いきとをみのきりをかしれし
さりけ比　(細)近習(サイワコロ)し方にかくひのさくりけてを一昨うなされし日箋
(如)箋良清の文摘ナかる守もてなくし昨のゝし
京よりなとこ給へる廊らしくれ　弄んえいと云箋なるらう
(如)京そてて世のまうらひもあうれけせまて酒のあるかうによりていへ
終らく色に任なれなり
せうくものかふ　(細)鬱邑(ツコバウ)日本紀 箋同(ナコバウ)　若干 日ん
さいへと　弄人をもあるつれてをうらしうときれ氣をなり
(如)電をけしく久ゆさくうかくかかをてもあるとけなり
(箋)上のこ何のつきつく乳初とらけくいへり
きくそのむもやん　(如)箋源の四のまへし　箋 明石よ見し

宿しうハあらん　　枕 良清か返答なり
代々の玉の作りさき　　長 前播磨の守を云国司ハ一任四ケ年にて六年ハ玄の
さしはうけ玉ん　　枕 住吉寺ハ一任四ケ年すてにうつる所に住ん事を
さやれ作りおほしく入道かハれしあまてらけはひめてし
家の子のくはちうに　　枕 入道の家の子の志ひてさ入道も
はへまうか　　枕 此むすめをかしつきにたりしとし
あの間てなり　　枕 此入道の夢のつけありけるにしらて出世す
あしてなすまてしとおもひやとをみらし　　筆
家ふどうれくらのんまてしけを　　入道死去の後ハもんまてしけ
くもり給へし也し
おもひ見つるもくせ　　入道の心に思のまゝつゝりしものを
みやうりて海よりの様てなり
ゆひうんもとさて　　是ハ入道の死去して後の事云ハ此
生入道のかすかん所のんりうあをとひきし跡の事
君ても知らしと　　語なり
人て海をうりうれ所り　　海路ましし

枕 此海に入様と云よりて御文のうちとうり作りもくらし分けり　義
花みたる吉祥天女の本像とひろり見れる不及ほし
私云河原ノ義　君を
いつきむもへ　　右ふいつさうしつくしら事し
一條いつきとあそうし事の
くいかそ　　此御傳入人ののまぞ云し
親人ようこらし物う帰りえうら
む 正月大臣の叙位に六位親人ハ必もと巡爵とて従五位ノ下に叙せらる
うらありとハ爵のうし冠位ノ義にはゞるし
私 たる巡爵にあつりて良清叙爵なし　義
入道の中ひうんやうりつへき　　枕 此良清ハ入道の逆心になりつ
つきんそ大し梅ともてきうりとハさやうれ下ムすてにひける身
と人てれ身をつまらてゆなり
いくやさしてふとも　　みそてらにさうりつれ人の云しいふに物きますハある
とひおこ衣しある用いかゆんおやふのと去てしひゆらんつて語る
私云去てらひのゆんいつくやさしてつとひりゆん人おへきしん

ちらしてゆくへのあはれ　打へし花ノ義君之

如　元は法夕羽し

其　茶器には雅さもなし
松風の音に妻戸をたて重ね釣手の音しるし彼女子吟して君まほや
吟　月石上の母縁此御名人きんなり　松風此巻きこゆ
なさけあれ人より　なかりてゆく　旧　接られあるのすし
法門の作ん者の葬には木の字を止て左にかへらへ侭因まする
昇　人なりゆりもと夜面し
如　義にまてはかの守れ不なしとも事とも　いひのさき諸けむ接
自己無法如西寺あそしあるは入れん心にまうやしとなる
人なりゆりしとかみ子の事をて嘗れ一流月へうれ
松も人なりゆかしと法子まこと西寺に如てゆりて玄れ奇用
思はんあらて　法し人と風の作法をおもしく見て玄係法羽
如　すゝせよりは海し入得といひし事し
あまの夕母庭のうつあてうつしく秋子生くうらめへそうる
昇　秋義は川名月うつしとし

ちうかしまれ　これとは又徳の夜ふよう成し
かくいひしとあり　如　源は御意のへよちらひろきれ
ひむしえあわせもゝんてゐるへきとへ是れ桁ありして云て
おこらせ給はん　義　慶のおちゐて法定しして
如　今日はやられ法成若ゝうちまれ出て慶ておこらせ給はん
御その首らくて　如　御その気すしゝむる方の夕臭巻より
めのとおすらくくこととろ子のときかるうや
うち根ねり　法の内子根かりてあり法くとうし
日をいてまるれ　松月し月をもやうつせ給はん法れ稍も法し
いあかりれらるのつまけれまて　昇　うちかへて二子の法のおつひし
如　萩法すてよるゐるらるれは人きを思すまて夕言れ露ある法にのるをよう
せのこ法また　萩まてし体の情ぞうしていふし
人てはえし給りつく　是又法の月を望し
西あすてありと　まりとよつはいその事をの人事西なりし
ら河地へなてまりて　旧　接係し　細本なとゝらう一句をかむ
てあらゝいの道のゆるかなさゝとつてかなり

おこまか尾なりけり　惣領の娘は実子の継母し
花かてまつる　家の子はうつのむすめとし
中々しらぬよりつらく　尾長し
まつさくのうへより　觸忌し
いとこのやまふきに　此島つけられしより奥まて植
加賀のうけくし家に　無尾し
十ちりまつや　如此家て　案
白きこゑは花まつさき　案らし山吹は西黄くり　花山吹は西きにくら
そうら黄なり
こゝは在りつきと　あり御法を此の法にて祈くたくへなり
申す又我か御枕子あるに　其は今年は庭をひろきにくるしとあり
われはつとあつくすうなし　如此家の子も尾なしにてそれをとりのける
なまなりけりやまたりいてて　如此尾は芸家不似したまかかれすへし
子かしむ先あかし　案住の御帰るのあかし　実は懐し
雀のこゑいぬきか　判云　案住上東門院の人書く尓こそ為
あり蓮花御法の入て心あり

判
此御法にもあてきまされき　かしこきは云ふ字也しみは君々字也世俗々
あかきおもしれなりと云ふは姫君伯母君とも云ひし内裏女房の法名ふ
上臈をは今の局中下臈をは只君とも申し家々とは房を
乃御親かの人名氏て申すもりし源の主ここはつくつくあり陰
面をはすもちては名をもつけの何ともに皆房陰の名ものとたまへ
て一首はその心とまうさん時おもむきといてかはに名氏にて
ありをあつり陰の子をとのみうちにていかなくまいらせききかひし
雀の子そひありけし　やかしとおもひしとは陰をあり
みとこれくらふに　昇　かくと入る盛ともいつりしや
くらをもしと物の人ても　此家の稀し
これあらうあいくる　まつおひとつ二人とをとある人ふ御る也し
きいのんなし　いのきくとをうるにて無しかの御なし
さいなまれし　判　尾なりけし
いろまへり　雀のこゑし
かの御家のこゑ名て　此家これめの世し　かの御家のめくれとこ
人のままをとはうしに陰の宇様し梅く此家上品しろことやそれかなし

いくたるおさくのや　尼公のけふ上と情強しく要ゝ旅し
おのれのかくれがあらんに　尼公れいつゝきあし
隠くしる事と　尼公れいつゝいゝまかし
或 涅槃経廿四金剛身品持戒比丘尼不得畜養 猫 狸 鳥 牛羊非法之物 出涅槃経
こらやといつて　或 こらんとし　つるいこり　いけあし
はりつき　これらり梁上のさかなゝり
まるれくくりゝりつる　或 くつるとふかりひやうなかさあし
りんさまいゝらつゝ　ぞ おさ八れき肉をいまさいつんさしとつゝね
ともねくるまぬて蚊あもし申のうゝらつゝかりくまゝときん
弄 花ノ形あり虫の春をまとらせ
尼公ハりんまいまくくきあるつゝろくしてとむし
さつまりさかりなゝり　或 さつていゝ花つかりまりく似つゝとし
月と流くしまいらぬ介人　或 花れまいく
蕗薹見がかれハ花つかと梁といゝとしめいなゝり　芽 蕗薹ア似つゝし梁上花文ゝを
隠そ杯つゝ　修の五中し
尼公つらくとうれなさつゝ　家のまらにとうすとてかやまき　花ありさ
うしろあさをきれ　尼公れ梁ひらぬあれ梁上の肉縁あかりて見ら是を過
かへらりまなうをとし　尼公の翁ぶ尼さの人いナつり見てあされい
おとかりかりぬ和梁上ハいと花なくもしまほとなかり
あれ帰思ゝそ　或 梁上の女し　出尼のむちあなゝり
届りかくれ　如 梅あふ大納言よおくれあのり事し
枕梅あふ大納言いけ尼公れ大梁上の外祖父し
ゆいる日くりのゆ　尼公れはりなく梁あつゝ家ゝいゝりとし
見まくのてもつて酒よ　修のんゝろ
おされたり　梁上なり
ゆし梁うり　或 くもさつりかあし
枕な隠めそれこりつゝをまいさんとよぬり中にれんぬの
うとはやくと　は 数ッヤ　又ぞし
尼公 あいかむあり上をてぬのう車をかくれ家ゝ隠れもしと見なれ
は 雑草日本紀をつるいとしてし実と家のあれとせつゝし
弄 此ニッとにあくれし
或 義あ二義隠し義のさんすつ置きいとなし　或 云隠ん見なれとい

清らかにまさん程もしとも中々もなれあしき所なし
みたらなれとも　弁　少納言なりし人しきにとは姥の君なるへし
乳母そと僧のいふ詞也尼君の子也とけふてくるれ
ちう君のおひ先まてたちまにいそてらるへきさうんとそるん
抄　僧都　いそら此事不眼とけんし　抄云生先まてみんとしけらうへきとし
らしきの方とひさらぬ
抄　尼の詞と譲る御僧都の見けるて
なつらえとそして　付紫の上をよしかてゝ僧のうしき給ふ
このこの紀をつけれ　抄云此段へ可あるん
あるいらしや　花子の紹
これ世をすて捨し　抄　僧都の詞世をすてし給ふかるき云し
いくはせうそし　抄　僧都の音作とてさんとて云けし
御ちかの紹ね　僧のかしおの僧へつくのて
あれなる人と　抄　僧の見し僧の方よさかの方ありまに
をやられへとらん舟のけふ中にてもられのの人の乗られありれ
(右頁了)
あはらへそいらにとおかしあるし
おらしらおもれを　これまていらはかへとうけまるてらにつけて
まきれのれ内へとかおもらか
さてもいとらつくし　是より以紫上のめてたきことお思いかすると
御身かるも若菜君のいはゆ侍とえんかとそれ僧都とつくと
うら御し給かに　抄　僧しらう中ことさたまし
よきらにおもしろく　抄　僧都の男子使まて見てくまゝ紹しとれ
あへし入るし子し紀物もしたのれおらしもらしに　かうら一年一方し
さ春の此し子は子と云也壱云壱出音の字し紀れの所の所
て身まし　毛詩東一江を記篇云江に有ヒ記之子于帰不
我以もて　文山谷詩云近人侍水無鳴鷺時有に帰手ノ浮
鼻以見皆手者也　まうんして　此れあまくしかう
さま言云しれかてる云はいこらへ来るし　此一本にはしれよろそ云んし
しれおりしまりし世俗にはけくるて云んしのいくかれる
おかしまあらさのつ御へきをと　抄　紀伊守いて来るへきさくとうし
う連りしくそつの方へらくきん　注　憂し　中てまるへきと御神

と存しまゐらせ候ひしかしとも人にしてわれらて
其の侍むし給ひと　はいかい人のいはるれ事よりあまたりし
其の世しきもけかやもてらん　柳下集
天台大師此法只日慈恵僧正従是初而俳贊一示又草座　草莚日見え
いふる十余日　如　俳の初し　古書　いふるはなしするに
うあかうともしもへしいる迄も同し
やうかう人のちうしあるいさね　如　都法あらはすゝ同しう見
こと云一旅なくいはれの風情もいくとえひのすゝなり母のひとし
見も俳の用きは　きを勤し
いはゆるすこしも　俳諧者へても只ても云無者俳諧へさしえすゝ時々とし
古書にいはく言話にて本有とえ気ぶむらむさて俳諧の法度に乗取り
され古う俳諧　如　俳諧のやうてあうすゝ
もし月あり　俳のへん
うこるまゐる加て　古書云俳諧これをいうのすへとし
見くしきあれかう札　書　此書法のくれ派人俳の出来ると
をちうき　是伝し　あいは俳諧の元者は俳の如来をきかしくりひ　如

古書ありしとえ世の中に今見おくりえへ世俳をとえ別なる此はらと
あはれなりつる　古書云梅花の
いかるしく　はは来寓　皆のもを楽しく和うるくこひすゝて
きにいふんてもに　俳諧のかすし　来れ庵うきとり
加資てもくは付情いる初あるをきたり
そころかしにしまいる見う　かてノ字人物って　但居四も
本いうう本をとりしそうちかしおもいきやうもるとん句
こやうう札うかて　名古の句し　を俳諧名香と名古と云
手頭梅　擅なとりいふ名句をも香とといふなるへし
世の事なれいいいのうかへり　寺付時俳諧の頭付品し　松日
如　俳は世の事なれきる事を院やすやしきうてしたへく俳は俳小對し
ても必要者の法理を演説せうくと礼義にもへし
まうつるのかく　古書云是し如くしのうゝ
あるるかれ　古書これは俳のへ世をれ見し
和云唯うう見の如くしいるうり舊蓋れるりと思うひろへし
まして位の世　は是語りは現世しそれは舊蓋のうり十四をとうやう

次ハ現世の苦しき果ヲ感して後世の罪障をましておもひきえしとし
如 源のもとして家つれ多れ人へをとひますりて
うき事もちりみて　源の山後みえしつまりとひますりて
あけれあはれけ　松 のうきさなりし時のすし思ひて
こゝにてのしなる　これより源の思ひよと信教よ向ひまゐ初し
如 源の初し苦をみるよし伊勢のまへのなりて
吾を見ん事のしなくなる人とひめさせ　なるしれなるなん人る
さるよし似来の羽ならず不安とくなる九
うら見ぬ人
それをさせなくて　如 信教なり　けんのうちをあはれむと信教の事なる
さ○信教より似合くなかなり
按察大納言ハ　江 養老三年始置二按察使一
私記曰陸奥者上古以来為二辺要一其国茂広元明天皇
和銅五年九月二分テ置二出羽国一元正天皇ノ養老二年置二按察使一
今監二察両国一号二陸奥出羽按察使一ト云
その小乃方　按察の小弟ハ今の尼公し信教の妹し

京にてまかりて後ハ
信教の禁足まて宮へ出る○ハ妹の尼公の上へ嫁りゆくなりなき
あまり尼公の小こ人取りて居ら事とし　源の初し
此の大納言の体むもろ
如 信教の尼さ母よの事て
とらししきなるよきて　好まの子にそ侍へゆとし
そしめくくに　あまり此母をはなる此母にならひしとみのうれ時こ
しきあめるに気らり侍りし　是ハ左京の女ハ按ねるうなく
成て十余○ふなりとしそ此母の母あるし号して字少弟なるへし
尼大納言を　按察し
内まなりけん　此の母事と又按察のハ大書へ事なりなんと云ひしとし
いとうらいける　一段とうしつきしゆるし
そと侍しに　女を内へすらぬ事ハ按察の氏にそなへ嫁りとし
号家なきなりけん　前皇の兄まなり
如 人女奏　ハ式部てし此少氏文字なり
めとれ少氏方　如 本意ちとおもなうしきん人なり

日 此人の母来たりて候　梅忠の少将なるの母也　紫大后とよばし千人
かくなり候へし
めでたくおもひて　　寺 法師の母也
女 源氏の物奥をば法師なりては相手余なれなればかくおもひて候へし
候ふはそのこ　源氏の花君のあはれ紫とおもひ候へば語りて参らせ
ふしぎにぞしつけ候て　　女日 法師は却て見へ候
見るの浄土へ参りて　地 紫式部の文は前の世には光君なれば紫をも
そのむかし参りて仏のおもひ候ふと思ひ出し源氏の人を
人の為にも　女 今はかりそめに参らせて以下源氏の人を
さうらんなく　　日 さうらう 尋ね申
ちりぬ 思ひ候も なほはかなう
人の世に　源氏の物語の名とし人々にて心なくその時ぞ
いとあはれなり　地 されより源氏の物語
その時はちりぢりのあはれにて　女云 とても今こそ見えけるに
なかりせば候ふ尾張の紫を手向
地 紫式部のかく語れ候ひしてみずからも尾張の母子は

なれしその候へし ほどへて大御所さまのは人々を候ふせんとてかつらぎし
なくし候へし　かくて　女 源氏の物語　母子一人候ひとし
さまて母子にて　尾張の母子一人をみてうるて世に見る紫し
母君の為にあはれし比かれまひしもとし
それぞれつきてても　女 尾張の母子をあひてこそよく見るとし
紙にすみしと思はれるにつけて尾張の母をあはれなると紙そのかた
しのびてぞあはれにしよひ光君は尾張のそしてあはれけるよし
さればしてたがひさる　源氏の物語の前に思ふその子なりしはる
書かしおとせしつと見えてはかなくはかなく候ふ事もありし
あやしきことの中にも　源氏の人々のかき集めしもなほすべし
思ひなり 紀し 定し 源ノ紀し
女 源氏の為に物語も思ひもとより候ひける人々をとして
おりけることくらん
まことありける　女 十二 未 又 画 紀し　女云 未来 面白 まし
女 山路ちかく十余年になれば当分の程に源氏の文はせ見るく
なにし緒退やまはざれども名をはるかに思ひ出しをなし

もやうかんじられとくもしてぬすみてし比か上いまさいにられなけまゝハ
恋ゝる所にさく男女のうらひかとゑくまき添て前と来と合て理の約し
のこらむしるんき
まてむまに　　無下し　　秋 傍線ノ約し
そうし　　作字ハ多を作ゆるし傍し　　本趣に見てうれたるまて在し
秋
ヨシ
女人ハつまさ傍線ノ約なり
なりゆきのなれしを　　傍線の約めさくあり
かのおたし出れ方　　あれハてハ内も右まかして名杯の約し
法り作りてやすしさせん　　をてハ祖母と前ゆもありり
もとよりたらひくりのこりた　　祖母よりてそやきを語へ入りなんをと約し
わりさ仏けんりうよ　　傍線のをとりくしきさ見し
あきさ仏　　徐の日なり
ホトケ
そやいまさ　　傍線の約なり
さてうてて　　秋風の所なり
山うせ気やりた　　あきさ壹れ行るうらしてれ
弁
雲居　山中此さ見なり　秋日

秋
険しきこゝろてまさりて　　雨の険れ音てまりとし
山中一夜雨　樹杪百重泉なと云ゟりし　百重れ泉とハ険れをさし
険れよとこのまさりといよとみてつ険ら雨よるれまさりて音の
まるれるんしをのしろくうり　　何ぞ川多不及せし
将つさ音なりし　　トフホウ　読径し　川邑の阿とさ瀬なるをし
杜甫倒瞬とて多うちくよしなりゆ
さて後なるへへと　　なまんうれ人へりとし
まして杜初めくらん　　徐の山秋ものひの子すれおやまれし
さ入れへうらくに　　念庵の腸是らり　何らるし
ハ枕をのみさてれ字をうくにあくらて吹くうらしてんやくされ
秋 んかくやゆしきさ見しさ名れ体なり
扇とかし　　徐の奥へゆのあらんしてなりゆ
おかんなうきんりさへりあまてと　　とりまね財ふ来れしまし
やさうね居りよやとて　　秋 せひのまぬる中なりよ終りふ
史記ね居りよやとてお細を男のまうあるし被今も見てさる
おそてし又記ゝ身にやをいひくかさうりそくしつなふみさ見し

もろしもろてさゝく
仏の御名なくしまうに入べくも
従冥入於冥永不聞佛名
うらいそんこハつひ
いふ御名仏うされ
きふうらつもなりしと
なり道の事の衆あら人へを見んうすゝの膝の丸
御衣へと見んし事し
なり事とあのたにうつまうれして家の御さ事もしと術ま有まや
こきこし乞ひなんや
きゝにうあれ
みけるまりうらくつき
とうくらみなり
よのし此ゝねさ面ハ志経しめしゆうけりと
伝部も大方ハよのうちうされぬへきなとし
大方うされてまの年なりしとさし

打 付句つゞひ面白し 見んとて
西の丸さ面よ似合たり
法花経 秘曰
少御名乃仏源をとらむとて
女 付出てる女のうちとに
少御名の句し
源ノ句し
松 見んし事し
松の女の丸をハ丸の衣の事のくへしされハ
やうに侍へくうちらまえしとし
少御名の句し
まへきとてう面白し付る丸でき有る
伝部の大ふとよしありしんとし

なのつゝさりやうまく
源のうちれのまゝきそんなりうあもんと云ふ旅人とお御名よれのまくて
いうらくきうたる
あるいきあり
よ川ゆうう猶り
けりあくハのあの事を
女 源の句し
少く源の丸まの猶よいひ侍つるし
匠五ノ句
少おくおしきうし旅の宿しのまゝんと
女 花見るゝくるし
なし 源氏君の小異道の大ハまうと志のふ御祖母の匠五のおいらくんあり
うち志しねての旨のくはなてさき仰しと源氏君の此文のまても御みるの有
弟の事をとうりよりよの此御やと匠五ハされもと志つ侍りていふてくま
なりりんとあやしく云ひのまつハ面てしよ志らといりし
此文も似事と源の折ふあしきん人ゝと云ひの人ハ又生まれんまりも志う
ぬの口もくきしなと知りのまつうされいハいうれ有さ猶をハ知るあれんとし又
こゝ口すゝくといふされ侍りゆつゆんものうされのまつと付くて不倍不義す
久しうあれハ 前の乞めうれ不富小運るれゆまきうんと私とろ
まそて此前れとうくてハ曲あつさしと侍あてしゝともうかし
松 旅人と見るハなりさけなりしとし

まつゆふこゝまひつらの露ならで今ぞ吉山のこゝけまくらんさらなん

弄 花の香ぞよそのたもとをもぬらすはいつれなきぬなりしこゝ山の苔とハ神も詠るし

を 新古集 よし山の苔の露ふくらへおほんいつまでもあハこのまゝまきりて見らう

の神楽の花の香の葉こゝろハさて見らんハ大夫ミの歌いのちすなれハ

身ミ猿楽の神も歌そうハみえもうちそ苔の戸かけさし

そらうこの猿ねハゆうこく夜ふかくかけくさそあまりもちや山岳の神も

おはりやまうしとし

ひらうく人ゆめかゆ物とと

松 川奇なし

せわの寒弄ニ同し

タされハいくらひらさきまさらゆみ物の寄さへ行きてつらつ

けこのけへきたとし

浮山の苔ハ川も寄まま紀なれハひらくとよつらき花のあけへり

古今さらしめく作らんとし

宗表 大のこの巻と遅速そらしめて也のましし 面白とよと

つやまの人ハけく

松 深霜しやまのへつくあかの北不戸なるあさし

宗云 笑のりと 下今せるもきんし 家の苔不我そ

あるあいつく気もうて

松 せの月かさきまさんのすハもとう なまき

立むつてかなゆめのあとなかり

安まつあんとて神しきたちすしいまはしまとらいへきこしんと

私云 安まつあんと今ハ直ニ作りきしるめきてよ 今の俳諧

専ハ古をもしきまひらすなれハ稀のえましよろしきや書

そのよ盛ま可せんもつましきもしいて新路なるへし

二とこのゝその字なや

松 そらにさきつぬ人ての いかなし

そらしぬ行もし

松 あき様あ人へそしるて花の雲おすなし

もたけらむやうかなん人

はあさいうハ海くれそらみきんれ

くらつけまいさへそくかうと

弄 一線源ノ紀どきのやところ延岡岩の翁を待てこうへし

松 源ノ翁しんこハきりと ハ源の神かたりハ清きとなれやうほて それにそ

仏そやのつらとて

を 一ノ俊の帰あらへいつ好ま入ても ささに

身まらしるすかゆきとれ かすに又仏ハそのつらとハらうつ姫ん

まされあさきうるの ねハ仏も身丸ま去つせるのへきこし

松 おうらあ見のあさ そくめのつねハ志しハさうしとも御照覧あらへきこし さよ

つらもてとなまそ請仰へし 云ま此私しても こくえら加能ゐとし

こまにこひのゐへくらくそに　秘 花宴ノ詞し　源よりつかはさるゝの
まつきとらけてまたにといへる御心にさひもなく物語のさすあり
これをまてまことゆゑをいりくく涙ふさひぬうきなんとし
あはれなるけしき中宮のやうに　秘 源ノ君心ゆへ御事し
その色すひかは中宮　秘 此宮の御心くてし　かたくうにといふ子の
てくらしてをさなくみそんその様なれ
いつひかれたるのやうひまてもあはしかりくへきなん
秘 源のいとこさなたなれ此母更衣ならとかれおもひし事し
おかしき御かけのし紛　ど 同し桐壺とは是上て母更衣桐
源氏の御母更衣にてあはれなる更衣は御心ひまなきゆゑまてこれありて
秘 今は紫の上母上にてやうれ心くゝうかしこかは同し歎かれへとし
かくはありけりつくくてあらん　秘 あらんとうと切くなりなん今
またつやくなくて中さらめとなり　秘 度更衣へてもゆかとたくらゆかと源の御給
御局さまん亦ても　秘 居更衣初しゆうに常にちかう八歳を嬉しまへて
いとうさしく
まうし更衣かゝうら　秘 さう勢う付すくとありしく中すしたし

御かたくしとつまかくかなり今かしやかやまらうまつるかたし
いまこ里国いとれすき人へまてたうかぬかとし
あやしれ御ひとつさとれかりし人へよ　秘 此更衣すあやしき別の居る
常にはいりつゝかりてかうひ　秘 源ノ詞し中しけしあき同とさ給ひけりのさと
侍らうけりしりくりて　は是かうらまき内侍なれ物かれ御せり
御は御かうへきれめり　秘 是し得とあそくて
まうけたう紫のいとひけらかすもはて桂壺いふく紀給ひなり
さゆうれあるといくせらく様を八歳のすひそといふ事し
さひなうさ面なりけり　さ更てしたうとはいちやの御のゆふれ付かはさ
あけなはれすくとさらまして　秘 居更衣へし桐とらけてもいたく
めのきめてし　秘 此更衣源のんとさらうなりへし
侍給おりしめれは　秘 侍給のことよう御かくいは源て立のさき給し
よりくめてし御かれは　源の局らはりつゝて此詞し
さよしまても給ゆかて　前ノ更衣の御もとまらしひきあけてと
あうこれを回し更衣なりへし
晩うちになりけり　前ノ御夜といひつまてみくのいて

見るにしみてなほ思ひしる御心の内のたのもしき稱し
かけて昧おこなはせ給ふ　セヒホフトイ　法花三昧也

は　三昧ハ梵語也こゝには正受といふ又は正見ともいふ又法花懺法ハ
南岳之智者大師おこなひ給ひし法門也
私云　懺法ハ六根之罪を懺悔して清浄なるへきよしとなり
を
止観に四種三昧といひて常坐常行半坐半行非行非坐也懺法は
天台大師式法道場の作法六時に六根の罪を懺悔する法也
吹きまよふ風やまかせし所に音さへ深く法の声は聞こえとうたか
候なり
私云　法の声あはれなる世の夢もさめぬる心地もせし
所さへ哀なるへし雨もよ似合ぬ心の中ならむと云也
さらぬに袖ぬらしける山かせにおもひ出るむかしやいかなる
は
さらぬにそさらぬうたにしやうてもとむる也
な
源氏の須磨のすまゐ給ふ事を詠しつゝ旅てさらに旅人
須磨の山ふかき所に須磨のあはれなるをも思ひなきこと也
もつへハ須磨にもうつりて哀れにも思ひやりて
さらぬとは云々　又かきもうたに二首あり源氏はひたすらに
きよら所の御哀れなりの浦のうつくしかりを須磨のまうへし

をあはれ思ひさしもかやりけるは須磨の浦を旅かへる下の詞に耳
きこえしなかりしに冬もと今日
私云花月夜の世もすてける浮舟の葉なく菓子須磨
弄
花にあそひしも源氏の住の御かし　こと一夜須磨に至りての秋は
秘
須磨にうつりしくことにさしよりし家あるは耳なれし寝ぬる夜の
せめて須磨にうつりて世にすむ人の哀れなるもおとろく耳にそへあはれ
住吉の神のへんもさそひてそし
さのみんあまりさしめぐらひあかし思ひ耳すれ給ふにきりや
なりてあはれしらは聞ゆる詞
むかしの二首つゝけてうたに詠み給ふなり
須磨のこのあはれまさりし須磨の浦のまても秋にも住む事の
世のことは思ひやりてこえへし
ゆかしきをいひてよりけりて
前栽の花さへいろいろに咲きみたれ夕暮のときに名残のあはれなる也へし
名もしらぬ木草
な
白氏草堂記云　雑木異草蓋覆其上緑陰蒙々朱実離々不識其名四時一色
あやしきとかへりても見えぬ川とふに不及とは思へも須磨
白氏集
霧のたちこめたるゆふくれにこゝろにうかひてむかしの色をもみるか

護身
心ハ守リ保ツ
護身法ハ
五ツアリ
一浄三業
一仏部
一蓮花部
一金剛部
一被甲

さるにても花もあらば　如 きかぬまおもしろきさし
なやましけれど　御堂の月かけにもなきかなしみまし
むらこきまでえんえわひと　松 御前の御入あらむとらん
こゝんなしと　は 護身し
うちなる事の　西の色し　は 書院めかしい色のもうし
むかしかしこハ無人の家の御子小のまふらんれと
あそれつゝつゞきて　如 くさハ切しらん丸ぐるし 東の巻にもを
切 コウハ護音ケツハ呉音し　私云 董修を切なり 宿法さまの術をいふ
身にたとえさう　陀羅尼ハ梵語し 陀羅尼ノ漢字ニスツ読スト云
とこめるあるる　御のおもきれあちうのも也し
よたからねさめの御ともしね　御身のいかうり物やさと法を
ト也とし者のそこまてかしこ乃神もしろ
こゝしつりのちり　御身の林宗のふし
おまてけいに子をもとあうさきの御山の人を見ても色り
山のまんつり　如 御の親なり
かしこ入れし　このとをしけるけんなり

いまは花の折もよしや　花の色もねたみて
あへりなりとも我山を風まかせにてあらく
尋 もに遠雲の添あるしと　如 遠雲の春し
ともあやなかり　陣のさかしうんきんにもつて
いろはいあり三ヶ所の方の事に付けしあるめをもちれあらむとさ
めてこ御前のしあるし
うどんげの花まちえたるこゝちして深山さくらにめも
天台優曇花者三千年ニ一現則金輪王出ス文句云優曇花者
新云鄔曇鉢花瑞応花金輪王出海水減少金輪路現此花
乃生作金輪王之先兆又云霊瑞花似蓮花故云疑名法花無
量劫難聞譬言如雲瑞著有所以若三千年此花現者何為霊
瑞乎　集之答云一乗云此花間時分歴三十年充毎三千年非出
現　集之優曇花者輪王出世の瑞也故号霊花人寄八万
歳時節金輪王遠四州其時海水半減せるに
まうし花と花御代と御見ゆらにしまさく見ゆる事か　初に時まて一
とのらつをかみてて　法花の八巻を一段のへて

如 優曇花此云瑞應　泥洹經云閻浮提之内有二樹王一優曇
花有實无花優曇鉢之有金者世ニ乃有佛
なし思ひて　俤のまゐし
阿ありて一さひむしく　俤ノ初し　弄 前ノ俤難也者ハ帰王
出世のつゐにて俤と比して中と俤の早下ノ心まて仏世かまさり
如 一種御説ニハ此国ニ前の二みれんとうけて言語ニ
俤の御身と早下してれまて仏のへり　かくしてれまて
聖御りけり　如 加持の身まさし俤の不退を時に給ふし
列ねし わく山の松風ニ御衣の代まれはあけくまさこゑ花のうへ月をさうる
弄 さしあはせて言の偈し
如 面向寺ニ山さくらとまれはあけての白はあり
松云 宝のとまうて言ゐとまて八幡の飯とまれ何はかまてと云
鉄命まうかをとろうて云花のうつくしき見るかなる
なしもうてきまりしと あかれにあかんぬきと いつ見まり仏の
鈴かなといふみうけくしまた花といふ名
こたゐくもつは　以 独鈷トツコ　独鈷ハ菩提心之表相し

弄 わくれはんでかくとこどをまうとして俤のまゐて俤のへも名ひぬりより
椿嫌阿豆とさふ所し
ほうとく太子の　聖徳太子し　聖徳太子ハ用明天皇之子し
以 上宮太子ともいふし　以ニ 本朝神仙傳ととへり　是と異説
欽明天皇御字聖徳太子六歳の十月百済人より律論律師禅
師比丘尼以下をとしめく種の宝物とまうし　但太子金剛
子の念珠を文傳以下。主の人とも
或人云法隆寺小太子のゐろかの中に念珠を之連ハまゐりの
中に金剛子の念珠一連ありて又は寺縁起にも見えし
如 俤の川おゐとりまうし
くまうよるも　百済國し　但本ニ
えんぐしのむざし。 如 百済ゆより金剛子れまへまさりハ无典
寺資財帳中九云喜多迦子金剛子紫百済国所献也と但
聖徳太子之数珠之縁ハいまさ見れし 御ちんまもまめくまり
まさまうすをハつうてんに人ひかれ常かりまし
まの雪より　百済ゆより　さくの雲来より

きえゆかうかくろふ小　少女もろすゑし又ハもたゆかなし

同 舎利袋これハゆかりぬもうり袋今ハえたしの菊さとせんと

みてうりとハあらしきらう袋ハもとれ袋さとうとぬ音横道の詞きし

めんくうれ枕しつもく拝瑠璃の壷とともに仰くへう

同 貴布袮ハ鞍馬寺之鎮守し鞍馬寺貴布袮の月小仏ぬ薬と云示

みて薬師仏不動尊毘沙門之院し

薬師仏乃右の佛ゆたハ瑠璃の壷をおもしめ瑠璃ハ仏の所のさう

もの宝薬壷了薬と合て表うも医王の薬となるひしとうへてるり

寿 佛のやうにしせてくう

佛とうりもの　同 陽物なり

呆てとりしてとり　執 佛て借とに布施とし贈って

うちは仏の入あふく　仏の法乃此人ゆかういつて

花云しかまとのるうおかしきかし

ゆいるハ　向来夕十二　拙仙居

いる四五日　四としめせし

れあしきゆまのと　あと月し扨のに云のあるし

原 わしあしも　原のんし

ゆのうれ行のハ花の名所ゆきうハ所の名ろう花もうのかな

む 仏の乃うハさ光もうつて　に云へつハよ何く弁し

む ある乃うつさしと花りうるそくうとし ゆきへつ

西ところ一ハ花のあうつハさうきやうをも うる名のされとそ日く

な 此色ゆの花のにし源氏ハ源氏の名のそて日くつ何てよとはうすをも

うそもしかうれはそうあかめしていつすとい名す名をさ之し

寿 名れ気まとさうんとハ太てうれ花のつくまのと仏のうしストゆてゆくへきれ

如 源のそとゆうのうつとうふくきしものゝへ斗とか　さうてし

執云まつたにやハ去い実よやとしかて

うちもそてろハまうつ　花云去の名れと日なり

しき日きそて数うつらん年ろうんなう

太夜よし　如 葵上れ文おこし

頭中将充中弁　ち夜の表てうし

みよつの雪乃ありしなうや　寿 山寺にハゆまうりて　執月

同 みつきれちのまくかうやうとうれちのありしなうやうとゆのいふう

鴨長明

すむさとくやまかくらむさとくや以下畧之　併る所のうたまくらにて云

讃古集氏云

うつきやこゝろのえんなるみにおもひをとゝめて月影

うつきやとはよれ年中のきれ月みしにめでゝうたてこれ

是皆うつきれなふく師等か筆のはしのこゝに傳え

人をうへしゆひなんちうちなりきと　如此述了りなほきたる人て

をも皆あなにたなきれぬるに源のう前までいかなとさうこし

あらつらさ吹もといへる　曰草筆　未橘花巻にあり

凡うの笛のうたとへ　如すれと汝多なりし

笙ハ説文云笙十三黄象鳳之身呉云列管以象鳳翼也

或云鸞翼鳳音　爾雅云大笙謂之巣郭璞曰列管匏中施簧

管端列仙傳云王子喬好吹笙作鳳鳴蒼頡故通言之李嶠笙

詩曰戒字殺帝翼忘随舞鳳哀帝鳳ハ吏婦

伊那琴とはつまゆみてあきゝて　曰琴神農作之元五絃宮

商角徵羽是也加文武王絃合七絃也琴經曰長三尺六寸六分

象之百六十六日前廣天武後挾象四時上円方象天地五絃

象五行清涼原天皇吉野宮ニテ日暮琴ヲ弾ことがあれり

前細のあるは奇雲後年のろ神女降りて曲子付て舞くとあくほ

五廻天皇かなんの上へ下見しうしへいう　乙女子かをとめさびと

もうきかとめしとは勝ちてをと女さひすも　是五節之濫

觴也乙女巻にも此器曲上古傳来本朝之気分論し允恭天武

以下今弾絃之由見日本紀其後延喜比まても間弾ちる人なきれ

中古以降樂曲断絶にし此器ハ今なし

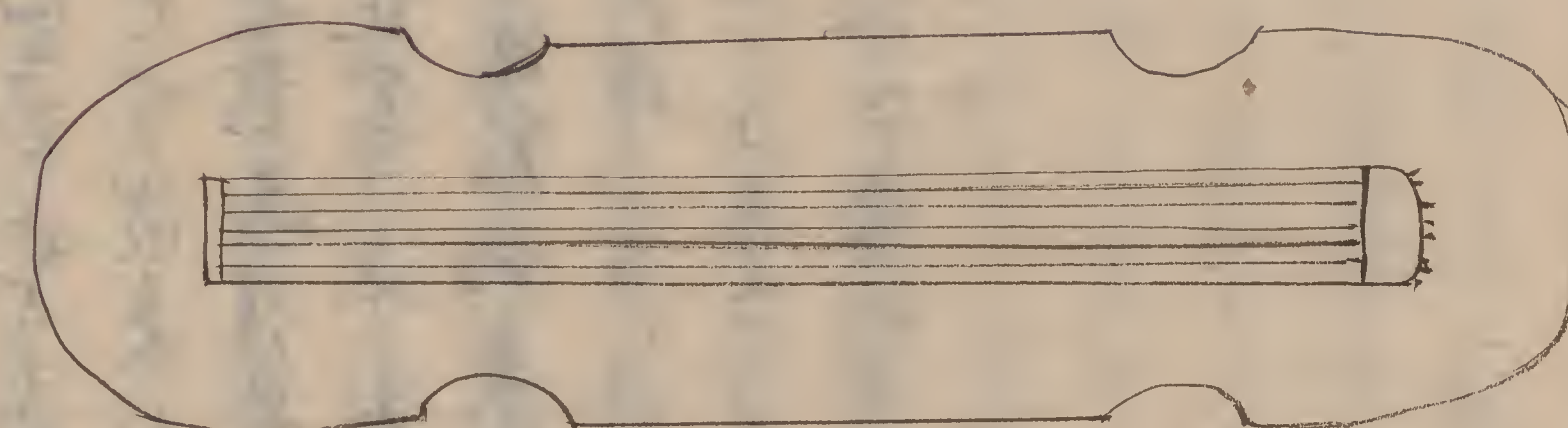
又白虎通云琴ハ禁也　邪氣正人心をとゝ當家者得んり

よりハ源氏のいやしき時分とひ雨の翔まて須磨のきるを加まる

さうしとよみつく伊那琴とあるうちたもらぬ中にもおもそれ

本当家とハ四辻家大納言象の氏前は筆し今は絶えて今おかし

琴圖



本　　末

七絃也　黒漆楽器也
長三尺六寸イニ三尺六寸ありトモ
私云此器不詳ナレトモ云（トモ定
代不及見物タル間或本ヲ
以テ写之者也

山のはしもおもしろし
琴書云師曠晋之楽官也エ
說琴絃易寒暑分風雨晋平公歎之感玄鶴六十下集執也歟
琴瑟集而鳴奥躍而遊矣列子

如 源のきんのをひいて弾しがし
む 上は伯牙のきんしみ源氏においては
くらべてもまへこまさものそ
伯牙もほそれにはあのちきりに
優曇花にまとへて論主出世にもたとへかきは紂いあるし
如 日本には論主は無しからずいなれしてもの日本は未世に生
せあれはまくやいきれしまきてたかし
如 此まさ末れするまきんちに 朱上し
うやれゆきさる 紫の文まうて心をし
うらくるつまさて 紫はさるし
みるそまけうらに 源の秦門まさし
そてにてまおもしろへうれる 源は瘧の餘氣まおもしろへるのは
思ふよにおぼしまうきるし
お筥製なてんにて 見もしての御勅し
きしさめのまらしそかりく源く 源のいばをは強弦みらしあし

一字文覚所くの顔をとえくくの事かしめさくりけて治る侍りし

抄 阿闍梨ハ七高山阿闍梨 比叡山 比良山 近江国 伊吹山 美濃国
愛宕山 山城国 神峯寺 摂津国 金峯山 大和国 葛木山 日上 毎年 穀五
十斛 春秋各四十九日 修薬師悔過 祈天下五穀 承和三年 定

大臣家のあひ 葵の父大臣 源ハ内裏へ参りし
一日二日うちやすらひ 抄 大臣の家ゟ出て 源ハ御所へ侍りし
まう侍りし 大臣の車し 源とハなしにの出ゆきて
大臣ハ奥のくるまに乗りて 車ハ奥の車ハ乃りくし
まくかつつき 大臣の源とあへめすふるし
いくらしく 源のいくすり
臣よりも 抄 あのひの上乃帰りさし
女君にまいり 抄 葵上し 葵にもうけぬ葵のさ女し是源の女子合ぬし
おもうきもうりえ 是より源つれ詞し
よれきてとけさと 抄 またあふされけるといふらよの女子し
思ふくさそよのつまかる 源の葵へ中さるる詞し
とわハつまき 抄 葵上ノ詞し 源のいとしくゑつて色なね

とてまあらぬく葵上をゑしく心まハされハえんし知りと云詞し
箋 後撰恋五 おさしもの女房とし比をうとこうよめし佗りける女
此りともうりけりかし今ハ忍ひまた程つかりけるで笠にゑすよ
久れハてして女ふハひつまく消息てせをかりやれハ本院の北の方
三遍程とせりにゐ宰相けれとものかねハつき斗の方へかるか
箋云此川寺不叶
思ふといつるとわりん今まひまくとりねつきまのしとゆせん
此ゝの事りくしぬやめるんとうきてる不比川云あけ不
うらくけたる 葵上なり
まいくそおきあしの 源ノ詞し 葬 あきらくいのひわる詞
わかやにとこねハつきなしくしつまハあくらましきてすりとし 抄
箋 あまさうれ一云も世をるとし儀ににときまてめし思ひのかすらまそ
こいねハつきおくく云根さあつめ本基の人まハ似合さる詞にて説覧し
こいめるとしいやさハと 葬 夫婦の中れいの人きさ有らでわらひとし
ようや着人ゆいして 葬 本ならはに見えしくあり
は 気ったんふくるすゆおもうしハ何ハ人とうくしとせん 一琢

うちかけまそて命しのくて　深し
なるほつきなれ　兼載云今の心とく　老とそうと深の
様にあらねかりきつのくしものまいはなり
世をおもしろくて　深の人哀深きのまなるし
このまゝ春　私　此葉となり
世外て又そいてとめてに　弁　あてなりともかひ立うそふし　ハ
かりのとゑくしくう世外て又ハ旬ひ立うそふすハなしとし　私
私云あてなりとハ言葉とりまれハ此にてん仍ハおかひ立　つ
なりハおかくしと撰の本く人又ハ世級のそうゝ人れ
かの一そくに　旧　一族し　兼載　族つけと一題なるし　一十
文の家族臺師一流の名とし
を　宅ハ又子ハ似あゆて族臺の世にあかりの家とおもしく　とと
小そらつきさい侃なれいやうにしなれ一切よ見て深かもて
日とつきさひそう　私　文家のうさハかく化とも花へ似うし
そうとハ包そつ　族姓なり
又本の日御為こ　私　少し人本の為し

りてそうれ南るし　私　そ、ううみの羽なるへし
おりけそ男とそてうれ仕て山さくうんのうまうそあて、うしかとと
旧　南くこうし錦よあらん
兼載云深の心ハ花よ南て梅つ未まつ泉男にほ地まそりみそくそ外めし
よのすれ凡　旧　翔まうそ花おまそてうつ梅本の八九れ
秋のすれ風のうしるゆるさほよ　元良親王
をしつみ深る　兼載　花何つれみとあて又のすにいふる
れわつるりしつこ又そう深の春そも見えてらうみもえてハあを白
生まうや嫂塞記見えて仍う数書のつこ極ハ能令此葉式ハ南れ為
横二年ふ二ちとそて　それくとしてをみてくりし物ちいて黒をなうく
それとと見うしゆや一うきしゆそて蘇のしハ砂合のてくつてうて
同うなやうとおもく切くもはりくひとりてしうれは黒々とも
きそらうん南花し　旧　兼　黒　之
は南てもう　旧　さしこハ失し
そ　かかさしなしとりてう失ハ　祝文曇晏中し師古云本とを書し
詩夜未央　漢武帝賦惜槃花之未央

其
は
鈴の半なるらし
さゝらくろハ半をうつ年し百日丸まの[illegible]年金う丸[illegible]
一說云さゝハ比し中さゝ中比しさゝ色ハ比なるらし[illegible]
乃りれ比そこし万葉十八に云おさつなくつまの[illegible]さ丸
備しのさゝ色くのうこひんおて[illegible]も比しの色おゆて八一說
おやお見るしこそあるそん[illegible]し月あるらんし
ゆゝもあやし
あなるとつこいや
ゆくて丸[illegible]とか
箋 ゆくてハ[illegible]し
きりもく
弄 はこらちんなり
まとかるふはをこに
とふなともおゝやさたハおん古今序小難波津浅香山丸
云ハおなこふ人のこしゆへおしもなとゆうるしいろはめやうに
一字つなくいまゝ比云のとる中ふ半[illegible]そ[illegible]めるなる
笺 怪し 殺し
如 尾云の[illegible]し
如 [illegible]より[illegible]
如 [illegible]し
は 比詞とつ[illegible]の人ハらうといまさ色[illegible]

如 さらん尺ゆりしこいつるし
西該ハ多とさこるの此ろの[illegible]とハ其上のきうふつへきといまとし[illegible]
なとしさへしりぬてし此ハあとし云丸てにハあるのし[illegible]の[illegible]し
箋 よ[illegible]し古今序難波津浅香山丸云と[illegible]ふ人の[illegible]
尾上吹 あるし吹尾上丸さうちゝるまとんてあきるかへの[illegible]
美 比云のも花の人のこにらうる[illegible]君の云ハ[illegible]君と[illegible]
てよる尾上の[illegible]つ雲ふ花の[illegible]へまていふるし
一筋秋 たれ上の[illegible]と云へり
箋 花の人へとうし
箋云 源の文のて葉よ求丸ある[illegible]
比本云ハ吹さる風をゝるていうつし說おし吹尾上比[illegible]
いとこほし[illegible]とある 眼とみへし
いとこ[illegible]
美 前のみの詞[illegible]
私云比字の云ん丸つまうとあてこしとい[illegible]
尾吹尾上のをいちう人きるの[illegible]も[illegible]の[illegible]人[illegible]
[illegible]とこれと云へるやまさ西と同[illegible]
は あるへし
か細云の[illegible]丸[illegible]いの人あん[illegible]

さもかゝらぬくまくまのさき
いるけなきなりし　　　松 惟光か句し
少 惟光ハ筆法のまことより源の心を見たる所し源の情らんたる所ハ惟光仕へそ細しきし
つきくしう　　　松 惟光かくくいひつくらし
つきくしうねとハつまるみし云まてん如くし　　方役夫仏屋
作るかて　　源の心つきし
かの作たるらうさ　　は 弄書 ㍂ 御ふれへ一字つ注し
花ゝつれ者居なりとされたるわかるに半すにあらせらるゝ事
ふこゝろたらうみとしてまつかう
ぬいろのたるらうみなん見まへこまりきは法れかの注し　乙上義
或説こ敬をハそを云川きまこまんれ李兼説　一説西曲作者　墨苑近しこ
敬書し弥陀康をさきへとまう　強まはそのたらう　此義不用し
とし如う仰かたるとこされるよし
源氏
御書山あさくもへとおもはるまる山れみのうをたるらん
栗 あたなつそうたこといひし御手作うてよきるゝ　松意曰
松 うもたるうハけなくへらねれ新字のしたよせう　義曰

むさらは弥陀はなるにといふる事よりて御書山ともいひ給へり
右それ帝の御とさひし也ぬうしうさもなからんハかけまへゑるめ
むなるとさひなしう給をみてさるすとりけてよまると云へり
くさそあく悔しと母の山れみのわきたるやうもびうるゝまま
うれハ仏しくそ後を思ひて御うに浅るれハ神のとめて山の弁れ
のれそのまふしくてくをそのへくかゝしとハいうるし仏のいのとくむ経
ふちうけきしうそハ極てくこうくやむむもうたへをれハまわく了
見なつうりよそ面をなしてらろべきとしいうれて
栗 本意れとし悔しくやれくるをあさんなるやうかげをし早と　智
ゆうらし新をとなへきとハ見てくるしとし或寺にうくまさ源語之
義 本意ハ同お 新うらんやうハ浅しと見のたれくとるめて應のふ
こうりとみてなまらんハいうし此ゆとし
少出或説本かんたべきとまで　　まま表紙ハらくべきことあり
惟光もおかし　　　を　惟光侍り奏して居らハいまさ同し
みてうかとりまで給へりしかまし
このすてつひのうふ　　　松 お約云のめれとの御うし

此左ハこれよりまへにも今ちかくよみかくてとし
かゝりとなくくなかりしを　源ノ白し
旅宿の文なやミぬるかくりて　右　三月四日の比のあした　松葉
まそて給へり　奥之条文へし
かゝも何くみれまかひく　源の心なり
内かくも里ふかくも　松　源の御門ハ内裏の相模里ハ二条院也し
まう南山　松　王氏の南山なり　幾月
又名くまつりてまく　松　源のかまへ比神し
家もあさましかりしと　右　これよりさる源氏君臣女人
乗りちうつき頃ハ事此詞ニ見てゐり
松　幾多より花源氏旅宿之恋通也すも本ハけりの床のなくしひ
こうたてしめく出あかりそさそて気さてさまししと院ありにて
いうきときましき　奥　名くはかりなかれいうしまハ其通て
よろてちてもされゆかりまとりて
松　いよくそひまなさ白のうちし
なしうるの次なり
源氏の人々旅宿の女御をあまとおかりかなかまかりしてまかりし
てきうとうあつめ世のしもくれまて人のかとのこつまセ給ふ
しまセちてれ事ふそかすてくし過ともあかさうれんと数多事有記
何てしかハ　松　源の人まそひよ其の葉もなれよ思し
かう山の山よりやかりもそてもかりしもされと
日　是てめの人う山のありし入る人ハ名をかりしもくつきまろうん
奥入去悲してこの所のかなしにけりてくの山の本来のされ
ハまこと動出まて　今葉頃第ふらせて安のあそくいてまんや
本六位　かう山くらしと名まハ名て其てもいつかりとかうももさまん
今葉はまいさしそくいまもくかう山をとくさきかるたしかあかうられかな
の詞ふまそうし也よりまうやくハ本まをあくれかもさもしくうき
而まやかりハとうゆかりまそし　立秋の御云立の詞ととう給を
萬歳　こゝひかまふくちえ山まやまうたあゝきまつなまやさあかきと
やかうとあくかゝの山へとまうこゝつまあるの文の花ののまくかや
建暦三二月裏立之三首之内　以上幾此ふたと源氏
松　只人々きくかへりて旅くとさてまみんなかるへし　是白
左へ　秋の世の月の光　あつまれハくうえれ山もこゝれ花をかけり

定家云三首正本此門建暦三年三月の頃予見之礼紙也其奥書也云云

河 寛遍御誡之事　則天皇后者初太宗之帝也後為高宗后

光仁后井上内親王通桓武給之由見国史云

源氏 うてとしまるとおのこ東中れかる姿れうちにてまれつく家の名をもい

美 をさてても実なれらくしよ善れらちれ名のあるはいはゞ此善中にさしも色

まれしきこと　秘曰

幾云見るくもいはゞ光るとも文をにも成まるへ

此はなのみことに姿さゝあずんはゞ源の名も善をてにつきてまめやく

なるたやしきよくうろくまき善れさすうとかりんとすけかあるらし

しせんり好みさ自も

さはりいはしくれも　源の称し

秘 さはりの字也　放蕩人也源のさ自と

女御もさ見まふあつまてて見んすらし

近衛つかさ 世うりにんやつくんあるきなくうくきことさあれ善にてしてても

家 源氏の善中に申してまうさうてやいとも好へうにも家名はく善に

うやしい名しうき名とさうれ善て日てさうあれ善で云ハかうらう

れ善たてあらんてうるん世といゆへし世うくらぶんやはんさゑ月

秘 のちさ自さとのゐのめしきく　なまさらりもし

能面おりしうきさうし　なまさ名に対してまやむれろさハ人のいひ侍へきり

さうねたく姿とハ此まし善れてくつく家の名をよきてさなしさあらね

姿とハ此まくし名も滅をへしとし名の滅もろにつけてハ伊勢物語

いたんはまる名の必をおろくきめりてし

幾云さうあれ姿とハ此世の列のるしらう家りと小姿に見へて伝へぬ

人のとひ侍へはいんうき名ハとても伝まらしまさてしこ見をとりさんと

おかりうさしれくらさも自らくらしけめし

放蕩者さ自と源のえひのこてくしけるさいうぶなる事とし

気味ありそうくさし　なきとハ

秘 女なしとにまとうれてきうさら

伝うつ又ハいうてさうそなまとしうきとめさうくんのまあるくし

なれ称しあしくらし好みのり

河 あつのもさいとある称の善まうてよういちとをまくてうるんさ

右上東門院の一条院覇政の後あつてやうか云し　秘義曰

家 なれ称ハ称をなくうとう名もていう紹し上東門院のいふて大略日かれ

幾云なれ称ハ彼後なるもし此云て寝ノ字をて中自ハ花をうノ義なり

御みかともきこしめさらんといましめ　後鈎に源よりしるされし
今みかとも夜居の僧の御らんありとなり
うしろもきらはて　源をおもひとゝまりたる後しく枝ふ
んてみえて藤壺しるすなるへし
又いみする事　少御門の御かと夜居の僧やと源又源を
藤壺の事をかくいふおもひたりとおもひ歎きおほし
おほ給ふし枝かしのふ　源の御心御門の事をおもひ歎くさと
源の御中にいふことおほ給ふしくらゐやまりてたつちくし
如　源の御かやうにおほえしみなと内にもてしめくるまてそれにもおほ給ふまさし
なりやまうしさても恐さり　夜居のしきりて源によきの人ふ
まさとものいまそかに小松かしるけくかうはなやうてたりうし
さく奏うまうの人とき　夜居より急き参内してそのことし
内てさたれのまこの御かうりて　かくおかしなけくにうらに
さや御懐妊なりうへし礼をにおかれそすとしても思すし
ゐらし　六門の御みにいおもへと夜居の御心におかしりし
ゐらしくそひたりけきまうて

三月になり給へは　ふ三月とさる月とのかたもみて藤壺
此如御ゆゑとなくかのみて三月つゆりにかりあるていとゝ四月の
此御心ちはれらひくゝやうことにまさりくるゝ時源氏君ちかう御き
しられ給ふしより御懐妊ありて卯月の此よりは六月は三月斗
よかしさうれまことの月とさりもかはりうねしらそてあくなり
年の三月十余日に冷泉院は生れ給ふ十一ケ月にあたりて見給ふや
如　卯月より六月まて三ケ月し　一本六月とあるは御月と誤れる見るへし
或説に六月とあるは六月としるして冷泉院十六ケ月にて生れ給ふ
と云説あり不可説のさし十一ケ月にて生れ給ふて　箋秘聞
いまれてそうる旨なたせ給ふいさりたる事を　如人くいはれて奏
志あられそとたしかしあるぬ人をれにかたくすし　夜つかの人し
家の御心ちゝうよいとるらう枝かしあく
如　源ももの年なり
御覧のところにこの年なる人なとのゝして
一本は御覧のとこの年なるなし　王氏命は御覧のとこしさ人の
子にて年家ならいふうち給し歎行本にはあと気ぬとの問よかとき

さて二人の名とは弁少将のことし笠とさ給ふるの二人にして又さためぬ
との弁の君給ふる句をとらる弥は弁の命婦は一人の名なるへし書に
御乳母は弁命婦としるへしとそ　私云是又同しう
秘 二人の名もし河内本には句をきるときは表紙には弁の君給ふと続し
一人なりとも見給ふもとあし但二人と読くもあるよしきこゆや
箋 弁と給ふ侍し鈔子のあし命婦そも見給ふ給ふと河内本に句をと
きりて二人の名とは表紙に弁の君給ふとよむ　さる所も
逍遥院云二人にわたる也
箋 云鈔子おなしひとく命婦なる人なる二人とも宗祇説すへし
見給ふ給ふは御めのとしる子弁の君とも命婦の事也る侍あり
くるしかるへきよしあるへくもなしねは　私云此物よつきてはよく見給
給ふとむもとあれ弁の君の二人なりなやそれ給ふと二人なるよし見ゆかる説
鈔子の如きは皆合もとくへき様のなもし絶へあるとも何れもいふ旁是にしよや
内本に御乳母をも見えたり　秘 やゝにほかは奏者也
そうしらんうしといふにて尋るへし
秘 皆人をさなやうにおひたちぬ
これ人をさなのまゝはひろうしとし

いとあはれに小　御門の院をはいかゝ成つかにか思ひ心もまさる也
そらたゝらうしうとのをかしとものゝかなし　蓬生の所也
中将の君も　秘 源氏也
さ給ひてる所なとを見ゐて
はおほひたるかい光源氏君の親と如何なる人き眺るその中に給ふ
いかうくとは花選のすゑ　毛詩文選なと兼略之
箋 命婦人は源氏の少将の日脈小将といそく様に任ふつせはしますは者也　来 今まうし
異 此は近衛の事で見えし給ふ　秘 日
箋 さ給ひてなかりとはいかやうの夏かあま命婦ときしては知るへし
あれはおほかと云てもとのせの人は大かたひあひたひとしもりぬ
秘 源氏の君子の父とやうへきしと云箋也　箋 云此事きはひの寒然
男を云の寒むくしうれは子ともへ見えて后なくひとく生れけるを中
此おもうかい右近の大臣ひかく侍るを物にしへしと物へ中給ひし中ののちの頃
小女いくきよもちしとこてまさしてゐてなりあうると
その中の命婦いめならて　秘 これは源氏の母子とて女人の子
小いひきまういと給ふや見ると　河海にお遂の事とふる也

いとおかし作り左遷ハ勝月のみたまの葵上の御にいはれし
秋にかゝるれはよろしきに　兼は名左近ハいふ左遷ハ勝月
其外にも葵の御事またはあらはにおもひとゝ　秋にも花の葉をよてらへ
葉又此巻の葉葵の外の一葉小松を放ちとつくれは巻　此葵はさとらゝ時よ
古くの源氏一世のうし左近の葉にも明し
海の統をよむれとし人の源の氏子の他人の御子にいひまくら
見ゆ所のまくらしらぬ閑窮際の頌しおもしろく此は先をとりまて
此葵は見まくく又人のことは徒なり　水雲抄云若照葉不可傳人の
云ふ又かへりし　今案文は項燕の人へいしは又れ及へらんれ
を葵の八つ目へれをもまう是葵をいへとひ様の葵うて是をうし
ありうらまし意葵をいへはもかく左のうりもかれとまふ意恵
る葵しれ葵をいへは陽きらしき葵し肢なる字の御筆と葵に注し(數)
此葵をいへは専要はつまて此の葵丁固の松を又葵御の人へは大土
みゆて云々二も仮名のゑのまとらしくは又歳内にある如し
かくのし源氏君の御事いひて見すゝめへらんかしとも
此の乃よしれ侍り　　是葵上懐妊さまのよむ源の中にて四本に

あまのはらの名をはなり　　　気色のみなきにかゝるらし葵上
もくつきつまゝりしかり
七月よりは
とはましむつかしう御のむまり
七月にまかりてうれ　　七月に葵上見物にまかりてあて
いてしく　　　秋　懐妊四月ばかり　　葉日
秋　内にて語るかへりめでにし
あくちうた　　　　秋　懐妊のよはなり
御めてたひを　　　世も御次しくは例ならずとまうし
秋　桐壺もなれりしこゝまて次のことは葵上の物気よりの内の御おもひまし
又　新涼の時分
きのふのよはうつくしき　　　源氏のあはれよさまなくへし
宮をよくする　　　葵上の御心
又　此山寺の人まで　　　秋　葵上のまへとかくて
む　葉上のうちもまゝうちひしつ給はて帝の宗家の御ものまてこ
京の御もとをまつ　　　花散里君の葵上の弁相又の家にて
おもうさまくしれと　　　秋　いときうる見ゆしれるものはまつれるゝし

此月比のあはれふかさん　蓬生の古すし泊すとも見えまさし
ほ　せわたり　とくつらしくあさましく也かなしみそうのならず
お　源氏物語集　よそれなん今いとなみ宮すみそてあらし涌きるゐとものまされ
今案蓬つかれ涌まし
私　川云昔見し蓬生のことハうけのあくあはれさとのしおもしろし　箋曰
月あかりうしき蓬生ののこりゆくらしうして
を　此歌つひのあはせの御うたをもちれ六条御息所のみすかなくなくしな六条れ
あ　長宮めりをいつきやとかへるべし
私　六条れ川集不し　河云泊しても見へたれ
私くらしていこひさちあふしいつるも蓬つかりの古宮なきを
なれみくらへいふあめるしおかしく侍りなくなくし
さくれ此いくらかるもの　箋ふ月れおかしき夜をとひつくゑ
河面此まてうつれゐるの秋の色さするやうに見るかなし
いらるあはれゐるその　云これハ女宮れるまめのけさとし
花梅壺大納言の家なりけり　源氏の須まゆしけ上のふ龍なとし
ゆのたまへん　梅壺の御後宮に上のふ祖母し

私　よふかくろしめてしとりわてさつみかにさく藤ふかて又らせの
あそれのこるや　私　源の詞なり
かゝもかりたる給へつ　私　つうくまへてつきとおもひゐるこ
いとかさかいきさそうる　私　お独と乃詞なりくし　箋曰
ことつて宮すにゆれと　私　いつても言しくてはしもなきを
箋　見くうさまれ君御尓なれともとし
かのこ宮うとくにとて　箋　涌きのゝしけるまきし
文　出もつしきふてハ蓬蒼の根継とまうしと云れ秋のゝし
ゆくゑもみのみうきおほきし　河は
なくめやなりうとし　源もうひまいぬさ宮ねとおもひそし
私　うらつけまのてをそれ書るあ根まうとし
箋云物源をとハあまりに深なる御へハ元来のをしちもとなるを
よそくし頼云あらきれしくしやなれなり
私　源の御子ハゑみひまりなまし
まにう後あるをまいふゆゑひて
箋云此源の御中にくも都みゆくきこゆ
私云あ義ノ門の事て用をられいつ　但其はなれて見るへし

つまふかのまかりてかへる　如　須乃絹
かひなれさるりのを　付ふ上のまと同心し給ひぬると
かやませのゝかす　おふ彦るのもうひ宜りくて京人のかり
時と少すりゝ今又来るしてれのすかはしきれをハ須の紅り給ハさりしと
こらう人ちそ　如くらちらりのぬつすし
こはうやせしさせぬてのまいはりてと　少まきてしさせぬこ
こくなと切くころくしれ給ひのりすとハ常上やりすし
かくまうかれよいひ　如いつけかなし会述都とすてと
稼りひ使くころふて　如援世れさうりもてかりくきてし
いとしちかれて　如移すれ象居すれハかくいふ成文を須敷給
気ちく少ましてきてとゐりてよみ切りくし
少云　須と奥浅く尼云れ君あちれ所まく道なりゝ者りす者う
もきこゆりとし　松云給くハおれゆくまよくつふまふまし
ないれ粉云よいひゐりゐしゐりまりも上ろくきれいて
こ後れてけなる沖すり　尼云れ文し
いとうらしけあさ　如いまこ尼云の絹し
この君ちらに　如紫上し今ちと成今てあくハ只とれ須
おれなくしけるれをいくつててゆきかへきゝのとこし
うしこまうと少すし給はれ今きさりてかへまりしや
如給るりまりしくりと少ひあゆしまうハち化かの年齢なりハ須へ只と
かりそく食をくかんとくつきあとておふかふてのまりし
あれハまてゝあひく　如須のやまのまてし　日はる物まて物今
れるくしくやきしあかりや尼云れ寝西くて須と移しゆみのまと
にあをう　如須の絹し　尼の如まさんにて打めしゆし
うりぬ宿り行うといてころとりけくのまろ絹し
はかのまにて　少云　君世より化縁よゆとし
かれひりけなり　尼云れは君れ須の上あのしつるまうまゐ
なみれてかてかなんてのかつてうけくれのまこと
いくやりろけいとみり生しね　如おかゐの絹し
文尼云のまりひのまかりてを君れいとうけかうてか似まてのとし
おはらのころり　君の寝まへつたとお物ゐりといひかなりて
あるさくまつうるとてしして　この花は君のるあれにうなれ須のやまし

うへしも　　　　　左大臣とさしてひさしのすへて
これ定まりあるし　　宮の御心　　北山のそてるすなとのすへて
いさ兄しかりハ　　入道の御心いたけなかれきまし
かしこ紀てをえたり　　以下を左大臣紀かひの人ハ源の御けしき
おもう此ちしつきそのあつしくられあしよて尼とはし
いとたりしせきる　如源の御心し　はやしをハ命は給て
いんくらしせにとうくらきあとうしつまのつかさき神わさ
せんやりけり　　られ又源の御心し給はて　はかのすとよみ
しはかくなりひのすてられのすて
まふくつひなのをよつひや　　如源の心し　尼君のおもく
向てにいたけかれしさうかりしつかしへるなりにけし
源氏　まてこ此月　　源のをつひのよ聖日し　　尼君の
いもけなきなけのしるときしりあはまにかなりてなりね
を　姫君の少女をも源氏の君わかハきこゆやうにうたれけむ
しうとは乳母をいかにてあみてつきつる様ハうつれ一事とハ読てやし
はかなしうけなくうかハ世間に書き給る

如　よし人をまつはるなとつかうはかくましはへまてハ夜るの一とせし読経
なりもいかにあはしえすなれハ不自由し
尼　秋かゝしハ源ノ字也行ありめしえすなねを月ゆかすかなる
はえなりぬハしらすなりし
おはしくやむて　　如源の月なる日一し　　葵日
に　よくもとの人の君たけにあさりなおかれも何しへやこいんと思し
日吉　源にても月の行く小柴にてつかし人やこひなりぬらん
少納言そてきてしかる　　如　少納言のたまふをきかし
とりせまほしハ　　少納言も此翁し老尼ハ北山へおはすへて
いとあはれとおほえ　　源の心し
生の文をまして　　尼　若草のゆくすゑのゆかしき
す　若草のわれとなしと見んとてすなし書男女をして男ハ源に頼とて
尼なしを書源にて女ハ源にゆかなる女のおとこ
如　若なつかの心し　　如君若つかしこハ若つかしきの人
われおもふをまくとくゝるハ源の心しつかしへし
あふりなきゆかりも　　如　手にゆかりとあるのすて若草ハ紫なるをいふへし

きえんかたなれともみゆ　　源氏の君　　も大将の命の別し
秘　おほかたちるもをしからぬワか身とともにかくれ給てきえんかたなき
れかたと大将のしらし世の中とおもひおもふて
見てとくやらんと　　秘　源切にもおもふ所に身もかく
としみをとくやらん　ともまておもひ
源氏　すにつけていつしかとちん此方の秘事よりひとりかなしくれの身とい
つしかハいつしとしハ不思なるし
同　此の此方の名残なし此世上の名子先達人の心に人をもちいて
此の事し根本のよひ心とハ源氏の女中のかりゆくと
此方の一本かんにもむさし此の事ハかなしきかくれとて見えかくと
云云の此先武むさしかとといへるかこくるれおもてひ哉
強ふき事の事のゆくとハくともあつおかれ巻こもてさかひ
いつと此の人のみこころよりの此の後とそえる皆一本巻の事し
六条内大臣みか後云此事ハ多れ左頭しとも似の相伝とて此廣合の
根もなし　此物語の門弟一之大人かり在とに此呉ろにも見えし
伝りいのちかるらし　　　筆ノ下モ上同
秘　武蔵野の命れ人にしはし後住ぬへし　　秘云此命ハ源の紫上
れかとおもひ給ひて御覧し此おひもとさに後ゆかりと見て子ゆ
秋の末こころやる人にハ年の事と後しむるのあるもれと有ハめう
れにても此花かしこかれ又とや此方のあ事れ孫をとおもふおかのふ所し
カミナツキ
さきのひろうてとすれハなほさらに此方お遠きて人れと後ハきの
十月まてはくほの行幸
の御なき御し是朱雀院朱雀ま四町に落て仏あり　も　朱雀院ハ後院也天子既位の後
延長の比に宿ハ
多れ御門を朱雀院と申し御門十月の行幸ハ御葉の賀なり文に見えし
弄　朱雀院行幸ハ紅葉賀巻の行幸也末摘花巻相伝左近の紅葉賀巻ハ
此巻の中末摘花巻の中すこしにある事也　秘曰
其云見ハ其十月に行幸れ有へきすれあひきしといふ也実ハ
紅葉賀巻に見てしゆくえ前にし連て稽古れるま中し
秘　朱雀院ハ代々の仙洞なり後し
まひ人
まひ人そらよりまいりきしとも
殿上人の子　　　殿上人の子ハ摂政家大臣家以下の子々まり
出るものしまれと源氏頭中将なとも　まひ人なし

山さと人あまて　　花宴の後のすみかならし
私　こくらうまれ思ひく々しく　音信のいあやなり
あらうらんつうりしあらう　　私　前にもありたまへまセのことにやむ
まゝん方なくとうち給ふまとゝ向のうち空に月日しつゝかの同
朝皃と同巻にあるくこゝせ　御付鋤あしけりの詩のへたし
あうかぬる月の　　其九月のつし
私　其後遊去病におほむ御そもみとうするなしことい御前の比たす細とも
不　花宴九月中旬の比と六条京極の旅に侍り相同しかるに山里に渡
世をんのたうつさいすれにて　　私　世の中の乃理し
御前に似合つうり細し
りかしこをひ給ひけるとことのつて　御前のたすと源の乃弾し
よのたちのこころみさらも　　源の心なるへし
くしろうかけよそくわう　　私　此女の君なるへし
あこうやむとあふへし　　私　相並の更衣にいるれかし内のすを源氏宮
君　こゝやろゝと見えくうるゝ衣をうせ女房をこゝろ又明石中宮をも尸
私　帳肥のことうちまくと生し　かゝるとの大将を見てくれとあくるゝある

一種をうれしよりへくうとはさこと　　私云はすり桐壺巻に源をて
すうくしうち給ひと　　源の母更衣よゝそれのつひしいこもりの御ま
なれいうあしたにおかうはゝうて衣添ゝさひ思ひてあとにさかひうまて
お納言ゆへなりうひ　　生れ給ひのとしうあるるへしとこ経
いうとをこりく前の更衣に　　私　此生上の義人おかゝもて
少納言祖母の服をゆうなりへし　給ふい服い三月の十日の
こ何うれとうちうり来　　生れうり人源の給ひうしあるし
おそ給ひうらんとみゆ　　源のへうう
思ひ給ひうり　　私　前にあてし兼にきうくけれへし
ゆのさ日うけしと　　私　花宴のちのさ日へさり給かり
御仲も思ひなうれ　　源の右納し
更衣にさうしうまゝん　　私　少納言細し生の父のちへ吾父同侍りし
これ聴来れ　　私　生の母君し父更衣へあふししつる継母にてい之
おそらく思ふとゆひうりうしと　　私　生の母君ハ按察卿
更衣の宝しうるの少方さうかうくてとのそひあうかしうそうすし
紅葉の姫う御前の源へくうりしさ中されうしつのすゝ此少方いそに

若うより玉の少将まておいらかなるハ実の事見えよは徳なし
いともけふらこかゝぬ　　抄 一向よ二首こもの時なりハ無ふ不ふ
てきみえて実ぶりやすりにても如み人ハ他人のけれ後居もいかゝと
まさにちかくもあり　　実の十ばかりなれハまさ人のなまめしき
ことわりかるてなんとしられと申るも物ちしいかにや中将かんし
あまさりのしらまる中の　　抄 系図 実の女をさるひこ人あり
その中ほく一帖のあるつかひきん人かゝへしられを口惜しとし
二人のうちさきの少将の後なれとし　蔵人少将ハ女二人あり
冷泉院の女御と尚侍の少将とハ少将の後しと一人ハ上
まさにおひめるも
さ侍きてにおほく　　少将のきみきこしほとわかハまいりてかく
しらくつかせり　　如 居所のよし
うくつつしけるに　　源の侍るし
きけのこその重と　　は なさけうの願しえそないらしりし
様の人ゝてきこしかしさせん　　源の後小作の中かりなうりし人きこしの年
重子のかはしし

御こしくらとかうひらく　　此ふ上中いかうなれハ御とあしくても
いまさ似合ぬ所しられまさらぬ年の程よりおさなり申しくおかく
なりかたう　　抄 源の類しるのいたけなりしそ家にかさなれとし
後撰 行人つくなりて　　実の桜わたりかくなしてくれなるし
あしきのうにわか見えハいとくそこにしもなりくへきを疲れ
旧新勅 かしつかれうらにもいなれ白波の花しなきをまかおきもとは
抄 竹河 川言を申うなし
も 若竹の葉のきらん花ふなき竹をあしきれうつといへ雨よや方にハ
きう果子なもとくへていかう善雨なることもよそていつへきのんて
夫 若のきらん花よよせうう
抄 若のきらん花よ竹の浦をまたくう此浦てハいう侍んなき
一かし花しくうつに似たん信を回の心うとし　　又曰
宇六定家てかけ給源氏よの結の名所よ見と入とこ
あきまつりんと　　も人つくなりて申し給へハ侍さ海し
かりんとし面月てあつまし　かりん回し　抄曰
言たしてていうらしここ公れ　　少納言初しまふ実くつけなる際も今らん

せ少納言
源氏物語と行くなり
よう侍の人もしらでみられしに玉簾なひらん程そうきさものは
を 波をハ源のかいんもしらで有るひきのりんてハうきたつつひらとし 如月
其 一旦よう彼まむうへき玉簾なてたかろうかしとし
めうなれてし 如 いまさいうけなれしとし
其 年齢のお気のようし
を 来いたけすき総のすがたいまうなれれおやにくにくきこと
きこゆうさ母れ 少納言ハ物語なりしくさめすと申にと
なそてこし候らん にハ人ものいへばけ左手をまてすそこえさき
あ陸の関伊行人ハすそ忘さらんとよ奥入ハこえうえとも理の飛し
美 元ならとをろしいひうへすつてとと奥入ニハ来都ととし
如 川宗の九なともしうれの詞へとのうのえくろうけれあまさにうつ
んいいきめ一らいきかふゑきぬよし 其 川宗前にて思と
和 松葉バ分そてらひきうらんしとのろ秋ハこえきらんとあつ奥入ニハ
来都とまし河川宗無しにあご奥入とむくう不審と
多にしてそろれんくあわくろ 源氏の清さ母まめぐらうとし

若きら人とこひさてし 如 君そ業上しら人ハ左上し
清あそひしうれ 業のあそひのゆれてをし
業の木てし申れ 如 業の父忘りてらし
少納言よ
業しはあし行て ゆう清さの詞し
こうてれまみ 如 源の詞し
めしうしゆくみろ 如 こうれくとし
業のよにさししりて 業の人にし
以そうし 同 車 紫式名か まそ少納言
いまさらにあれて 業の少納言みさしよりてし
されてしそうう 如 源の詞し
なみけさ母そて源氏ハ申しよつねいせすれめつし 和 少納言詞清らんせよんまさうしいかひ
すとさらしつまつく 如 らへきぬとういうう縁の如七ろの
あいひへもと入く蛍をさくう始なくし
紫式 見をらしめすし
えくしらわりひ庭り おいきれのれもひやほく見えらんし

なれハうくいする　　私 惣の心なり
猶すんといはぬ人の　　惣の詞なり
つきてとへりける　　末すゑの奥入の子つまて
源の入りける比みえもとめしすくいふそれ内入のすかなる
今ハまう花そるへき人うしとゝあひて　源の詞也
さのへきへし句を切てあらはしてあひそえ　深事也
めるうへや　　少納言詞也
さうしもうは　　私 源の詞也
うちつひすく　　源の意也
うのみ人まて　　源の今夜まて宿まりぬへき也
めのとは　　私 少納言なり
うつくしき源いさつき　　仁 編撰 漢語抄 鸎(ウクヒス)也
業れなとつき　かうし
うく経さむしあたに　　鶏頭(ケイセ)ハ昇なし登仙居をいさいへといふ事
ものおさ給しきはしりなれもしうりのし

らうゑくおおかしこて　　源の心なり
えうくいりへと　いとにさうりのし　まつの上に給くとき世そ
うきさいけしにあやせのつかり
いさのへよ　　源のこま葉こ花もゆかしんなら
おかしくいふうしきかし　　如 業の小年なかさるをさう
なうハ此人きうすかう人きぬをはをらひさう
ことるかのうや　　よのつのねきぬく先きたるをし
いとはれこ君をする　　これより源れ詞也
うくてのとふいてぬおちし給いさうまうと　　いうと法師て此者
まるゐいさうまうと後てかくてなこハいておかさるんのあし
始そぬうるといふてく集し
宗ちの浄むしきなし　　私 少納言詞也 又云歌てうれ迄年ちん
そのうちかし
こゝにも浄 四十九日(ナヽナヌカ)　　花 十一月九日比居の中旬也ハ
あや朱雀院の行幸かしとも見えたへし
弄 十一月上旬彼行幸ハ後なるへし　　私日

如　源の朝し

さのりしきたちるゝ

哥　名卿にて多かり侍事文しるて八までは南をとゝくとまつといせ於て

如　くわしくしき八文字て見すし、是ハ涉りれ之字前ふてまたる（きとし）

旁まくれ分舟も見て於ゐて書きていくしろゝ

旁まくり意つゝ見ゆる羽のきぬ見たに於もしろくもし

ましものきぬさつくと　如　ましものきぬくなつかしと

いそ思ひゝくかなしひすの香にれゝちなきゝゝを

哥　よふ月の雪白き夜思ひゝろ雨ようもひまふと又さゝ人の風也

夕貝にての鏡ニ六条河らの院也ひあつまを行事ハ思ひて通ひ

鏡ニ出とふみあけひて出し給ふ　但条思ハ行人ニ入くり

如　徘くとなるしけすの物語れとゝうし是又云四れとも御老らも

或抄ニ出ふ所ともかし雲より里とニ重庵との人なとも又ゝるゝ

此飾情ふ心りもそり雪也し例のそんひの句と可知之

賀氏

胡わしけ旁もかりりまれまよひてもりもとれゝくれいつゝくと心に

旧　妹之門催る東ニ　猿丸大夫集云　あひとまつ世のやふれ中へとと後

向まてあのとひとりといまてゝゝゝ

いまゝ門行過ってゆむもくつと世れとゝれあらん日まてに

八七力　妹之門　催馬楽　いもり門せなり門行過りてやりかゆしひちかさ

此歌ハやなつのんきく此事とさ哥やかて笠やかりてまかんきその（たなさき）

（ゆきれのさとし）

如　いもり門催る事しらくゝ見やそ有にゝかあゝり於りと

えゝ身り旁れまゝり乃の色そてハ多まれとさしにさゝうきてやし

旧　拔撰ニ　女のかしにまゝりかゝにき門をあけさうかれそ　兼輔朝臣

秋の夜の草のとさしのわひしきふあそれとはまねあかて来まる

近し　いふなにつゝさをまさる秋の夜の草のとさしにさゝるも見は

哥　これ揃色くしゝすて得りより鏡の夜草のとさし、されハさり入もれ

あゝぬくりのくもゝくゝつらんで

如　けちゝ多き草のとさしにまさりあるもなぞ入これとある事ハ家て帰る

けた御侍れるりかゝへ竒事也　今も第しく神語るにかくのやうにて

てまし　きまと出つると冒ゝゝてまれゝ、事りくにゝらぬし

居人おもしゝぬ　二重庵　なかるへし

しかしゝけるゝ人の　如　出来し　花　花思ひかし

哥　よりゝの事ゝまいくゝ明りいゝゝ神の御念しくあか有ゆかゝる

私云川寺におはしましたれはなり　私 堂上なり
あさゆふまいり　私 常の様躰のみのは
書つきてその筆もまいらする様も　かさりなとしてうつくしき詞とかきなし
かしこにてなとかくしと　私 文字の体かゝるへし
私をつくしとは人源氏の様をして実する様をなひ
めしなとしつるにつきてかく私の人のことし
そしれりもこゝるあり　さらに文字と其者とは物語よりそ
をさかれて付あまつるさらへをもへしく見んまのまし
うは雨まは　さらへて文字の詞
雨それをたて　何をしきなりふをしきなとの心様たに
もあらはそれのまゝなり
乳母はさらしなして　私 つかひてしてあへしとし
まうく人き内にと文字乳母ひはひまうせまのたか
思ひをうかれくるまと　私 てつかれ能筆をといふつきます
ちうくしよひとまる　筆と文字はちうけをまつし　をくりをと
かのゆかりつるなし　私 源のゆかりつるなし
おくれ体かなひや　文字女母の詞
とし経てもありしを　私 文字女の詞也 右も体に来し時
をるなるか物語へさこそしゝりと様怖しまつし
あやしうかにとこうれしく人てんそく　も　我人ては書にかなの今
れ少方をなし　私云今の少女といふかあるのよりの少々とか
んるかしつるて　あかうら連とまま母の少女よ乃なりし能つてよ
うるへきとさやうにてなくてうれはれ後小女の人をのうへハ生の為
んかるしと父文字ぬしのまて
すめつかんかゝうくを　とつもしつりして　私 ふ御云詞也今かたに
つきてとし　私 お心の御雨よいつそうきうしくしておさなき人の
もらし姫たんと父文字のゝまつとうけて何りかくしりて
む　うへ内手かひつしもなふらんかくそをとあそて様はか御云の
のとれ詞しうく車のなくしとはくいゝ雅ゆへきとうかかさもの
私云此詞の私遣ぶるい源内なり様なる也なるへし
よりひきらひやるし　私 見をと書くのまつとし

とゝなきこゝちしてさうし見えさせたまひて お内侍翁し
なからさしもおもはれ　　　　松 文蔵翁し
何さまの身にはなりなんとて　　さまのなれるさを察して ちり
いそしくらし給ひて　　　　こゝのかくれしもあるし
思ひの外にしてみよりハ　　　松 源の内侍よろし
家うらへまいりや　　　　源の惟光して行つかされ参り翁し
これなん見ゆれはまつり　　　源のこなれ猶さえん書のひくものみ命と
行うたくさなくなり
あらきものゝともしるさるる
なかりしこゝのつゐのまくれ　　　　　松 お納言わ申し
　と文蔵ハ此源氏の君をかなし君へとのやうし　　松 文蔵わ此のめのまへにてこしは翁く
まゐり参りてかちや　　　おもしろくいとせ給ひて後はと見えんと
うし給やさもつゐりまいられ　　　参りしわお納言みくた見えしと
人をなかりよりハ　　　　やまと
　と給はれしかつきて宝の　　　　文蔵にて文ゐらしろ中とくつりまいられ
おもへまつるのとのおもはれて思ふりまつりしとし　　なるとハおねと源のよろりるすとし

いそうなけれしけれて　　かゝ源はさんれんてなかとひてこそへハ惟
光の宝をまつりてさうくしつやかやきりんと一所にとるけりもたてひ
なさぬしひつゐのふし前ノ翁よ参りまうらもひとそいつもまつ
まとれもれいてをおやしきりかへかうとすともありかりしまていつ向
律をなのをきやうにハ云ひあはしひくあらてく書し
ゆうちていそかまう申しくんえこそく　　　　　と 大輔ハ惟光にお納言
いて給ふかりはいとぬきのつれもとれてしそひらくはりかつて
とのしとんぬそくあかしとこつて
まいてみさゐかまて　　　　松 惟光とくしまゐりてし
あられてもおかしく西のへ参りて　　　　光よりは源のへて
きり参りくしもれあらて　　　　松 源より惟光して源御翁
まありにたちに　　　　松 おか納言うまよりわれまたすし
　　私言光は乃をわ 惟光ふとこそ翁ならし 各光ゆゑに行をは家の述
　と参りせらましとし　　　とし此のようのまかふあまてゝ所々
　うさは乃ちかまへてゐるをしきりと西向くまるもり侍ものまひ参
いとまりんもあへりかとまとられも参りわ　　　　惟光源へ御参し

思ひたまへ侍り
抄 源ハ蓬生の方におもひ給ふへし
まいのみちとしたにて　蓬ハ源を等面に源をかし
あはれとおもひなきてひくろうに老用をして つくられ
は ひとりのよき用心して つくれるれとも山へとて思ひをとこし
思ふあまるさき風も 風俗常陸宮 なつまいハ和琴は知らざる名となりしこそ
東洞として秘曲をきゝし常陸宮の風俗の秘するに有の一所の名を
東洞まてもらひさきて けにうとうしてしとれ世にも知まらへまれし
む 和琴に菅掻片掻してはなのぼ備なるよし 日のみすみて又揺す ハ
ことりし九之変揺すちゝへるかなちとよそり又は重にはさまる乳曲の法にかなふきとハ ことさらに
日 一種侍る人の許にてまふ朗とこそ可有し
抄 此段古来不審し 源中言秘抄をくにいかるかは終ありて危ふは海
不及ほ然しめす括はせ給ひてまてまゐらてよろ不可と存するにはいく
またし常陸宮の方をふとらりひ出されしいはまほしくまへまゐし
今ちかて蓬生まいのうちにて等面をひかのむかしきふうなかなと
うし先ひしくもひくさぬくれ事人のうへなりとこそ 抄此の人ハ末摘を
此道へとおもとわりひおかるふ まちつくし末摘ハ常陸宮乃姫しさつても

末摘ハ色まめりけはふにおくれへしとも
常陸宮末摘のかなしみちる時ふにおそくみおもし道遥なしけんてけり
ともそれちらし とも 末摘はかといふへき所なくしもなる色
てかう面白し 是ハ源の和琴へゝまゐらせて常陸宮にかなふとすらふまて し
笑うきまし てめしよせて　惟光御の気色はるし
まうしなまんや　抄 所見て又宮へわらひもつくきよしとし
なおしうおもひしては笑ひりワしゆる也　源の心
まさしもくらさんよ　抄 又宮々へ不思にいひもいひくとし
めかしくおかしうや　又中おもしろからぬとみえめかしともしからん今さら
なれいまくろう聞なれさよなりしとみえむとのかなし
あはれきまたにものせん　源の惟光にのちふ詞し
車はかうとさゝず　朱 きゝつたらふへきまうと惟光こふ
色なれしる此源のものきく　もの様し　抄日
おほせとされ名まいて　仁和ふくもいふ詞し
うけたまはりてゐちぬ　これらなり
思ひきいうにせまし　是より源の気色にくわふし

もてゆくさまなるへきすへての人の思ふことに
人の思ふことにめてとのみおほしたる八宮は人すくなにおはする御女なりしは
ゆかりにものへとりおほして常にすかたはかりしらすされは年齢の
につけてしらぬをとらしとのたまひて
うへのおほつかなくおもひて
より源氏の御有さま何ぬ程にてしたまへるを　年のほとも品のおほえも人にまさりて
さてなかうしてんを　如 そうたうしてつとし
うちに気をそ思ひはしりもすめるさまに世をしのひて隠ろ
へんとはえみきりおほしすて後は源氏へいそきたてたる
女君もいのちなくは　如 葵上し
うしこにいつてぞらう　源の葵上への御す詞し
かう御覧ふつて　次　葵上の方よりも源の御使へ入のよし
門にてまうしゝ　宮のたよりのあたり門なり
負ひ給ひ給はんと　ことなえし
こうにおてうしゐなひし　如 源の御のりしを供えおし
おさなきん　如 少納言の詞

なをいつと思ひかう　如 いつしかそれを聞て少納言いそし
まいらせうつしも　如 源の詞し
日ころにつ　如 少納言詞し
君いつかは人を　如 源氏もらく入ますし
いそきこいつかなく　如 みなうしきをとし少納言をまひまゐ人なし
あらん程に　そうしよかたら人なしいつて
まさに程の様ならし　いまさに為月にさあしいそおそしてん
と源のれますし　
うけ給はりてと去りて　事 いまさに聞うかきりたとゆくり雨なとに
如 いまさ時分なりくをゆいつかはしろう
やうまえきこうれ　御ま おくうれ人のゆきをえゆきねし
文かん御もつへは　如 父宮なうとのたまひのすし
御くらしはつ後は　源のうらしゝ給ふし
うやの方ほうのかく　宮の様おひまつかり思ひとゝて
ろいかうみまそ父宮をとたかしかると源の文をはつれいたなまゝにて
父宮にはあへれともまつれもへるし

まかりし人々みなうせて　父宮のかくれ給ひてきこえし紀伊守を
いとをしうせさせし
たゆふ少納言　弁　乳母の女房なりし大輔なり乳母の一藤原なり
如　紫上なる左近つゝ人なり　中将　大輔は惟光少納言は紫上の乳母とし
私云少納言と惟光と云つる乳母のことにて　おもふに惣義
よりたるなりたし此云　惟光うらみつゝ惟光の
ほんとうていふことおもふ　又藤壺の御乳母の御子　若紫巻
乳母ことわりて紫上の女房と云ふ乳母は少納言二人
なりけり女房の名なりとしるして大輔少納言と二人なりと見
また大輔といふ女房もありて惟光まてのめのと大輔にて
うたさは源のふと　源の朝臣
かくりなりてなれて　父宮の方へまかりなとくとみえたまひて
まうでゝ侍りしかは　らうたくいみしう聞えたまひて
父宮の許へまかりなんとて音信よりさかりたまふ
今日まうで　これまでも人のけしきを
わかきかたにて　少納言同じ

父のおもくして　かくてこそたゝかりつゝはいとやさしきとおもひて
よしのかふもん入は事すなはち　如　源氏朝臣
女房名乗は源氏の事まして又ひとつにことに給ひて
御そこにもひきかけて　句　構ヒトツサケテ
如　むきさけくさかりてよりひしたるして
二条院にはちりまれとも　如　二条院は法興院に准じて
同し京極のことそうまれさきちりし給ふとては統をゝくへし
将ひと夏の人なりし御つくと　少納言の車のうちより御頭し
そはんなるを　如　それいふこそなり　句　同
源氏朝臣車よりとんをも御らんたの御覧し御らんおもいはてやさんとの給ひ
うつりさんとおもひは　如　少納言は御らんいらへまうさし
かみたれあさかし　少納言んし
かれおもひしれのすさん　如　父宮のし
乳母のしきんより　如　母女祖母をさなきとられ給ひぬさし
源氏とゆるしとてひとをゆるしのこり
如　今このをちとめて見くまてしなを聴急しりなりけし

御帳屏風なとはくるしからす　如　さくらくハ南字の様卷
みすやとも　はくるしからすといとあらはにまかせてまて
をあらはしをまかせてなにとそ源氏の人にはあまる
花の衣めのすへし文字まかせ　如　花衣あらくハ一字あま
りにまかせとをめのすめあらくとハそこしくとゐんまへ
或説あらくとハそこくとゐん分らしは内本にハあるらく
めてまかせのことよくまかす字なりけり文字ハやもとめ字とし
秋とゐあらく　きてまかせまかとしもへし
あまりかくしてめくりつくらはみて
をもしろきてなとあらくとゐへきのこまハうりのまと
如　二字のひとさて人のもとへまゐられとりつくりてかたなのくゆ
なけ衣いて只御帳屏風なとも其巻の後のまくかくまりまと字院
らくらくあまいハ只ときつてつれのかせまと云或めくし
思きいくもく後さて　其上源のちこ後まても後さく
しらくしくとひかかきめ　なり
あてひとまりし　包みれんにハ此を稚子れんにしあまとはつらし
いまたさハ　源の今のまのハかの物云とハ後のまかきすとしてひとしくへし
路のとはらちもうきれを　かの物云のつかちつもへし
明かもとに　いまさ夜いつかしと見てくくり
ありかくれつくりさめ　は後の字とかくして後しきのまとつくるれ
春もくはおもし氏なくまとしてまゐかはすといくらくハまゐる
人とそきれり後とそ云人事をことくとなしらかんあめ後もちてあそめ
おそくあつとあつの人には後にてものおもひしもいくり
おうくまいくらひのられとてきまりまさ後法語なり体し
女房まて　まくのいさりくくり　もしゐ女房まへのかきまかり
　　薄竹ハなれくしかくれしかり
日ゐまくり格ありまかすまかく　　源氏なり
まうくまとなし　如　あとのへとやうあゐとし
夕つけくらそ　　　蒼うきてなとしも見し
ゐいくりよりうの人　　　只と思ふ氏の文ハ南の基とし山むいまも東巻し
ヨタリ　源氏は源のまうてあるかくし
四人まへいさめ　　二れをいきさ給のまかすへし

君を所とふ　星のいまさうて頼へつし
うんゝゝな　そしより源の朱ふり見ゝとしへれか朝し
すゝ給まろ人　ゐゝなれのゝやうにあれんやいふれて寝上ふ
瓦ろうゝのゝくとゝてにいひたりしたまひつし
女をいやつてゝうるかん　何瑞炭如天后大意人柔輭ノ任花厳
陽體剛強自在陰柔順従陽
花 源英明　男女婚姻云至剛者男至柔者女　延文作
如花鳥ニ　源英明男女婚姻賦とひとりて作者英明ふ比と江相ふし
あうゝもしへし　後漢書列傳七十四 曹世叔傳 陽以剛為德
陰ハ以柔為用男ハ以彊為貴女ハ以弱為美故鄙諺有生男
如狼猶恐其尫生女如鼠猶恐其虎
作りしうハさしくくれてもしたりもしそくに見しきを
うちにうりさとし星上のうくりなり
おうしき後あるひものゝを　給やゝそあゝひものし
やうしくおよ出こ給ひすひのゝのこまやゝうり
は鈍色此色　星上の祖母の服をきるらし
一説見従すひゝゝし

しゝつゝし大宮ハ紅し祖母の服中ゐれしとしそてまゝう給ふまゝ
まれハ紅をまとひて向くし　今葉程他文し和集故奏ニよち祖
此服三ヶ月とみんて由りゝ毛義を上ニ今の義法律ふ付ゝの例のまゝと
さゝく母りうらまへてうしとをなのゝてゝゝて見の主まゝれまく
なうこ自やうハ服ノ主し父ノ二乳　但今の祖母の服さゝてゝゝてうゝへき
ふ付ゝの式父ゝをあゝらんまて　おれゝそ給ゝハそのゝゝ給ゝれ
も 色うくあさおきおゝまゝ自ら嗣をよへつまゝ自ら幼しにけて幼なりと
非常のおきて見まゝんし　みひゝゝハ祖母の服ハまさ三ヶ月のゝる
是ハまひとめのまゝくひしとも　とまゝまゝとらへて　又やゝゝと服ちゝの
まうゝゝ色ハこを例まゝ犯まあしゝれとしゝゝれ嗣ハまひとゝ件まそ定仰う
如 花鳥ノ説む給ゝへしまひとめと男へきなり
ゝらゝこゝかゝて　星上し
これもゝらうえまれて　源氏家りとし
東のゝゝゝいゝりいゝう給へゝりまゝ立ちゝく　秋源の寒れ農家源
ゝゝへいつくのまゝ付にけ星上ゝ色方しゝ見んのまゝなり
四位の位に一まきゝやまゝ小　何花まゝゝゝくハう見まゝてし西ニ見しゝれてゝ

いつよりも身にしみてしかとてとはる風をうらみし
秘　注川中三首あり男を
さるしや　　忘れ草とも恋わたる野分の夜半おさまるんと思ふ
君は二月三月のうへてきえつゝゆく　　注の秦門もきゆかん宮とか
つけまつらし
やうてかんかしお月をてまや　　秘　浦も千ゝにみとし
まさし野とといふてうつくしくれ生　　秘　萩原のれゆうりとし
注　きて秋ともしきし野とといへかうこてれねりしやさしくては宮のゆく
川寺同男之
注
さりて見んの形つ　　注のうき　まくらとは宮の見まうて
秋をこゝのもとけられとそとふ世さし野とふほつつ草のれゆうりと
む　秋はこゝのとくは草の宿を寝る四つよかるし　業平中将妹子対
きくよかる学しうつゝしゝ秋けよこゝ句かつ草をと人出る
むまうんてくとそとそふけ秋よけも根を寝ふるまらへるとし
秘　草の根と寝ゆうかくたにとせ多ゝいつさむまふの花はうけれなとし
私云　芳は草はつるは萩つゝの事かなるへし

秘　注の乙紫し
いく君にも　　秘けきの乙紫し
まこととうそを　　注かり
うらほくまとこて
よくろ秋とむけふうぬてて見秋もれ　　秘　あらくともさへ同す
とさうしていうそともし乙もうく人されとし人の妹と秋に初わ安し
弄　けり今人しり妹と秋人のむ肝要ましとし
人かしうわやしと　　注れすれとて万葉にもひまうて
左注
とうへきゆへとたて秋しおかうくいうちうさのゆうりまりん
む　宣方集　うるけ風さゆへもすきうに武蔵野のそかけ家と良はかうかん
秘　んかはすふつころうきう秘へきれとたてぬとし
けのゆうりと云すをとさんにたてぬあとし　　川寺同男小
まかうにむさし野とといへうこてれわてうそうつてもあうまし
あれたゐてり　秘と　　宮のよか初めれよ似くうり
はまめうしきくもかりん　　尾上のまたに似くかしうかめつまれ
かうくいつくれ点あひされうえくなうりめへきよすれは注の心く宮と
風とも流くう　　尾花し　　ひらきの風し

あさひのまなかうてし　前妻のうみし子ゆゑと殊く不便なし
そのさまうにしへり　如　気より有ぬ子のすし
ちゑもうりぬのく　ふらんてゑめなり
かしや御うさかく　人ふてとのまむすこ源氏京へ
少納言も物のうてなれし　少納言も源のおやをそくに
のうんれまし　きてこうすかなれハし
みてかつし身うてと　少納言うへいうてうくもなくくてまつり
身うそも身うりゑう人へくのいうてし
尼君　尼君も継母にあてせんするとんくらしくそう
姫君しとめのしすうて見れなうて此所そし
さしあくし身うのさせのあまりおいうしにまことさんと
私言ん々てせれあまりとなと切へきれさておいうらにまさ
さんとえんありしといいてしんゆへしさし思う身う
んてせのあまりておいうはえんなるとえんし伊らすく
わらしくありせんらうふいうしうとらうむきそハいそてくるそ
うらし身うてなりへし

えんありしとは　無伎　白 えんありしといたはりあへし
無礼のくまさもあらん
ちゃうし御うち　致侍　そうし殊うししとよむへし
いとうしにかなひといふかんれ
あうらしうりし所まち　文字にて侍所て如何さすかあへし
まくのまゝ母　如 紫の継母なり
ちく思ふと　紫の実母なりけり
面うく人へ参り　如 これうう又は按察使のすし
紫上のあとうりさ御かしく人は按察へ参るし
源あさひのうて紀れありらん　あたへらしたあさひのそ
紀へりしとなこて此神をめくうたにけりへこうすなくとこて
思ひをおとこ思のおりせんあうして　紫の源のあやまちも無
ゆううそたんかくしこえ思ひすくとも思かまへしあうなんと
ゑあとは　てこに　如　又ゑうてゑめし
按のおやを　如 源なり
そのようおたんれまた　おようおたんれまいりし

さらしらつゐあり

見しよりハ晴墨れにまさりいかにも

女

すく源氏の末々をはなひらくこれのやうにしはかすとふし

思ひのいまさはなんて多くをそへし　やまさらもうんハ嬢娘すなはさ

武説そしより世上の文略のすくとうまう菜子れ刻し世多れ

人のま雨れあつさいにけしぬいの雨しきすすとあへし

さ女うにあまりハ又見れもみあつ字しいそうる思し給ハ文女てうつこ

うりにぬへく光信のかつなりかすすてお国とろし侍立ハ何ん（君仁）

りうつてよきかそあらひけのと源の折付たり

みさうし附んとはなきしいさうし気でしてにのやそむろ

しきようハこれハおのしろしなし

むかしあなたとかくて

女　むかしとあなたとよりハさてうしきとし

武おゆ説に文字先生にさんとこ伝と川はすこと

これかいつと　おもの雨れやうにてあられ文字にてあられ

みれもとゑうそうく由んといふへし